



# 日本イスパニヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第31号 (2024年10月1日) / Núm. 31 (1 de octubre de 2024)

## 日本イスパニヤ学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨 1-24-1-4F  
榎ガリレオ 学会業務情報化センター内  
Tel: 03-5981-9824 Fax: 03-5981-9852  
e-mail: g004esp-mng@ml.gakkai.ne.jp  
(<http://www.gakkai.ne.jp/ajh/>)

## 広報委員会「会報」編集部

〒187-0025 小平市津田町 2-1-1  
津田塾大学学芸学部国際関係学科  
中井博康 宛  
Tel: 042-342-5155  
e-mail: nakai@tsuda.ac.jp

## 目次

【巻頭言】	
川上 茂信	自分の言語を外から見る…………… 2
【追悼】	
清水 憲男	José Luis Abellán : スペイン思想史の巨星逝く…………… 4
【エッセイ】	
1. 萩尾 生	バスク語の人名とジェンダーについての覚書…………… 6
2. Lluís VALLS CAMPÀ	La nueva figura de «Coordinador del apoyo a los extranjeros» de la Agencia de Servicios de Inmigración: ¿Un paso hacia la integración de los inmigrantes en Japón?…………… 8
【書評】	
1. 金子 奈美	Olga Anokhina y Aurelia Arcocha (eds.), <i>Creación, traducción, autotraducción</i> , Bilbo / Madrid-Frankfurt: Euskaltzaindia / Iberoamericana Vervuert, 2023…………… 10
2. 福嶋 教隆	Jordi Pujol y Ko Tazawa, <i>La última conversación. Encuentro en Queralbs</i> , Barcelona: Lapislàtzuli Editorial, 2023…………… 12
3. 小川 佳章	Nuria Aranda García (ed.), <i>Libro de los siete sabios de Roma</i> (Colección Instituto de Literatura y Traducción 38: Biblioteca de Literatura Sapiencial 4), Centro Internacional de Investigación de la Lengua Española, San Millán de Cogolla, 2023…………… 14
【著書紹介】	
井上 幸孝	青山和夫・井上幸孝・坂井正人・大平秀一『古代アメリカ文明——マヤ・アステカ・ナスカ・インカの実像』(講談社現代新書, 2023) …… 15
【学会等報告】	
1. Juan Carlos MOYANO LÓPEZ	33.º Congreso Internacional de ASELE…………… 17
2. 小川 佳章	XIX Congreso AHLM…………… 19
3. 安保 寛尚	メキシコ先住民の文化実践をめぐる講演会報告…………… 20
4. 吉田 彩子	Día del Libro : 世界図書・著作権の日イベント「黄金世紀文学の光と影」…………… 22
5. 三浦 知佐子	京都セルバンテス懇話会第24回全国・名古屋大会…………… 23
6. 岡 あゆみ	関西スペイン語学研究会 (CLHK) 2023年度活動報告…………… 24
7. 小川 雅美・柳田 玲奈	関西スペイン語教授法ワークショップ (TADESKA) 2023年度活動報告…………… 26
8. 喜多田 敏嵩	東京スペイン語学研究会 2023年度活動報告…………… 27
9. 小倉 麻由子	GIDE (スペイン語教育研究会) 活動報告…………… 29
【新刊案内】	(2023年6月~2024年5月)…………… 31
【HISPÁNICA 編集委員会より】	…………… 36
【編集後記】	…………… 36

## 【巻頭言】

### 自分の言語を外から見る

川上 茂信

最近、自分も歳をとったなあと思わせる出来事が頻発しているのだが、そのひとつがスペインヤ学会の会長に選ばれたことだ。会長の選出は理事の互選によるが、候補者のリストを見て、まあこいつなら無難かな、という感じで投票した人数が他の候補者よりほんの少し多かったようだ。木村 (2020: 3) と同様「学会の歴史の中で突出して浅学非才の会長であることを自覚しています。自分が適任であるとは全く思」わないが、「理事の先生方の投票の結果でもあ (ibid.)」るので、観念して引き受けることになった。まあ、実務は僕より有能な人々が担うことになったわけで、その点は安心していただけたと思う。できるだけ邪魔にならないようにしたい。

さて、歳をとったという自覚は言語的側面においても著しい。今や、あちこちで見聞きする日本語が「自分の言語」ではなくなっているのだ。たとえば、東京で電車通勤をしていると、電車が来るので黄色い点字ブロックの内側で「お待ちしてください」というアナウンスを聞くことがある。もう慣れたので、そのたびに「はは一、お電車さま、3 歩下がってお待ちします」と思ったりすることはなくなったが、それでも僕の脳内言語処理系がピピッと鳴るのを止めることはできない。僕的には「お待ちください」じゃないと可笑しい（お待ちする状況が思い浮かんで笑ってしまう）。一応、若い会員で「お待ちしてください」に違和感のない人がいるかもしれないので補足しておく、これは謙譲語と言って、「待つ」主体よりも「待つ」対象を「言葉の上で高く位置付けて述べる (文化庁 2007: 16)」表現だ。ここでは謙譲語であるはずの「お・・・する」というパターンが謙譲語として機能していないのだが、もう「誤用」と言うにはあまりに広まった、普通の言い方になっているのではなからうか。

それから、最近気になっているのが「ポイントがもらえる」という表現で、これはポイントを出す側が言うのだから「ポイントを差し上げます」とか「ポイント進呈」にしなきゃ、と僕の脳が言うのだが、やっぱり昭和な反応なのだろうか。これは、一般に授受動詞とウチ・ソトの関係として整理される現象で、「もらう」主体は話し手にとって「ウチ」の関係にある（典型的には話し手自身）とされている。この図式に従えば、ポイントを出す企業（話し手）がポイントを受け取る消費者（「もらう」主体）をウチの関係にあると見做していることになる。僕としては、自分のウチの領域に勝手に上がり込まれた感じがして落ち着かない。記述的には、この「ポイントもらえる」が授受動詞／ウチ・ソト体系の崩れを反映しているのか、ウチとソトの区分が変化しただけなのか、この文脈に限った現象なのか、調べていないので分からない。

もちろん、こういう「違和感しかない」事例ばかりではない。少し例を挙げると、「行ける」を「行かれる」と言う、いわゆる「れ不足言葉」を実際に耳にすると、言語の体系性を指向する力の美しさにワクワクするし、ある学生が僕との 1 対 1 の会話で「ワンちゃん」と言った時には、このインフォーマルであろう表現を学生が教師に対して使う場面に遭遇できて嬉しかった。逆に、100 歳近く年上の夏目漱石の「文鳥」の一節「何でも駒込に籠の名人があるそうですが、年寄だそうですから、もう死んだかも知れません」を見ると、僕だったら「名人がいる」と言うだろうし「死んでいる（生きていない）」の方が落

ち着くなと思いつつ、僕の言葉も上の世代から違和感を持たれているのだらうと気付かされる。

実際、母語話者は「自分の言語」の外を知らないし、往々にして、その知らない「外」に対して否定的な評価をする（「可笑しい」とか「落ち着かない」とか）。スペイン語学の研究で母語話者にアンケートをとると、特に高等教育を受けてスペイン語を教えているスペイン人は規範意識が強固で、その向こうにある言語の実態にたどり着くのは容易ではない。そして、現代言語学は、規範から自由な言語の実相に迫ろうとしてきたのだが、規範を内面化した母語話者がそれをするのは結構難しい。そこで意味を持つのが非母語話者研究者の目（と耳）だ。非母語話者研究者は「自分の言語」が研究対象の外にある。それはもちろんハンデでもあるが、対象をより客観的に見ることができると可能性を与えてもくれる。ある意味むしろ有利な条件だと言える。母語話者と非母語話者は相補的な関係にあるわけだ。日本イスパニヤ学会には、言語研究分野に限らずネイティブの研究者もいるし非ネイティブの研究者もいる。どちらの「立ち位置」にとっても有意義な研究成果の発表と交流の場に（今以上に）なればいいなと思う。

おっと、歳をとったという話をしていたはずが随分脱線してしまった（これも歳のせいかな）。会報の歴史の中で突出してまとまりのない巻頭言であることは自覚しているが、締め切りも過ぎているので、このまま提出することにしたい。

- 文化庁 2007 「敬語の指針」

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo\\_tosin.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo_tosin.pdf)

- 木村琢也 2020 「イスパニヤ学会コンコロナ」

『日本イスパニヤ学会「会報」』No. 27, 3-4.

(かわかみ・しげのぶ 東京外国語大学教授)

## 【追悼】

José Luis Abellán: スペイン思想史の巨星逝く

清水 憲男

半世紀前になる。必要書類の提出と専門科目の口頭試験を経てマドリード大学 (Complutense) のドクター・コースに、なんとか登録が認められた。今とは異なるかと思うが、当時は博士課程の専門3科目と、学部3~5年生の専門外の1科目の履修が義務づけられていた。後者に関しては José Luis Abellán の「スペイン思想史」という5年生の科目を選んだ。登録した外国人学生は私一人だった。最初の講義日にいきなり試験だった。たしか「1930年代のスペイン思想史の動向を述べよ」だった。まるで分からなかった。Ortega や Unamuno 等はある程度読んでいたものの、それは彼らの思想、ましてや思想史上の位置づけを知ろうというのではなく、上級スペイン語に慣れるためでしかなかった。教室(60人以上?)の学生は一斉に答案を書き始めた。哲学を専攻して少なくとも4年の研鑽を積んでいたのだから当然だ。私は逃げ出したくなかったが、両脇をスペイン人の学生に囲まれていた。

そのうちに変な外国人学生が一人、筆記用具を持ったきり答案を書いていないのに気づいた Abellán が近づいてきて、「君は登録した教室を間違っただんじゃないのかね?」・・・私は狼狽しながら、「間違っていない」と恐る恐る答えた。すると「それならなぜ、この科目に登録したのか書きなさい」。私は稚拙なスペイン語で、思いつくことを順不同で書き始めた。登録した理由は自分にスペイン思想史の知識がほとんどなく、概略だけでも知りたいから、スペイン思想史の知識が皆無の日本人から直感と想像をもってすると、スペインにはドイツやフランスのような脈々たる思想の流れがないように思われる、他方日本の場合、19世紀の西周が訳語として採用するまで、そもそも「哲学」なる単語は存在しなかった、しかしこれはそれ以前の日本に思想、いわゆる哲学がなかったことを意味するわけではないはず・・・云々。知りもしないことを勝手に書きなぐって、とにかく答案用紙を白紙にせず済んだ。

数週間後、授業が終わると Abellán に声をかけられ、研究室に連行された。稚拙なスペイン語と中身の無い内容で譴責を受ける覚悟で後に従った。座らされると、「君の答案は実におもしろかった。今後、いつでも相談に来なさい」・・・その後、個人的に相談にうかがうことはなく、もっぱら受講し、もっぱら学び、素晴らしい講義を通して教えていただくばかりだった。

当時「スペイン哲学史」なる講座 (cátedra) は Complutense になく、Abellán は profesor adjunto だった。その後、Abellán の数多の業績をもって、スペイン思想史の教授ポストが正式に置かれることとなった。

Abellán との交流は留学初年度の履修で切れた感じだったが、自分の博論審査を済ませた後に(状況は思い出せないのだが)再開されたように思う。講演で2回ほど来日して東大や上智で講演をされた折、夕食を共にしながら深夜まで話しが尽きず、帰国当日も成田までの車の中でずっと話し続けた。そのころには Abellán の「至上命令」で tutear するようになっていた。

スペイン思想史などと言っても、自分が学び始めたころに入手可能なものといえば Guillermo Fraile の2巻本程度しかなかった。Carreras Artau 兄弟 (2 vols., 1934-43), M.

Solana(3 vols., 1941), A. Bonilla (1908, 1911)などの古典的著作を入手したのは、私自身が教員になって以降のことだ。

ともかく私はスペインに行くたびに Abellán と食事を共にするようになった。これは Abellán が大学の定年を迎え、Ateneo の会長 (2000-2009) になってからも続き、実に多くのことを学び、相当数の著書もいただいた。言うまでもなく Abellán の代表的著作は *Historia crítica del pensamiento español* (1979-1991) の優に 4000 ページを越える 7 巻本で、とりわけ 2 巻目と 3 巻目は分野外の私の座右の書となっている。

まだまだ研究意欲に燃える Abellán も老境に至り、個人の研究室の近くにある老人施設に入った。コロナの真っ最中にもスペインを訪ねた私は、駄目もとで施設に電話をして大昔の生徒という理屈で、2 分間の面会を許された。杖をつきながら登場した表情は意外に明るかった。約束を破って 20 分も話し込んだ。別れぎわに、私の制止を無視して施設の出口まで送って手を振ってくださった。「次回はもっと元気になっているから、一緒に国立図書館に行こう」とも言われた。

それから昨年 8 月 31 日、施設の受付に電話をすると、Abellán は元気だから面会に来てもいいとのことで、すぐに駆けつけた。受付近くの椅子で待っていたが、なかなか姿を見せない・・・しばらくすると車椅子を押されて誰かが近づいてきた。私との距離が 1 メートルちょっとになって、それが Abellán であることが分かった。すっかりやせ衰えて、見る影もなかった。応接室に通されて話しをしようにも、ほとんど会話が成立しなかった。外交官として活躍する自慢の息子さんの名を口にするのがやっとなかった。私が問いかけても、ほとんど言葉にならない短い音が返ってくるだけだった。

私は疲れさせてはいけないとの思いと、これ以上、師を直視し続けるのはつらすぎるということから、5 分弱で係の人に車椅子で自室に送っていただくようお願いした。最後に握った手には力がなく、車椅子から私を振り返ることもなかった。私はこれがお目にかかる最後となることを直感し、慣れたはずの道を迷いながら、ぼう然と自分の宿に向かった。それから約 3 ヶ月半後、私の専門外の師であり、親しい知人 (友人と言う勇氣は到底ない) José Luis Abellán が、享年 90 歳で他界したとの新聞報道に接した。

(しみず・のりお 上智大学名誉教授)

## 【エッセイ 1】

### バスク語の人名とジェンダーについての覚書

萩尾 生

バスク語に文法上の性はない。だが、バスク語の運用に際して、人の性別を意識せざるを得ない場面がある。その1つが、バスク語の人名の命名に見て取れる<sup>1</sup>。

バスク語の人名（本稿では姓名の「名」のみを扱う）を体系的に総覧しようと初めて企てたのは、バスク・ナショナリズムの始祖、サビノ・アラナ Sabino Arana (1865-1903)である<sup>2</sup>。バスク語の純化を高唱した彼は、非バスク語由来の人名をバスク語風に表記し直す一方で、新たな人名を幾多も案出した。それらの大半は廃れてしまったが、人名の末尾に -a ないし -i を付して男性名とし、-e ないし -ne を付して女性名とする、アラナが試みた性別命名法は一部に受け継がれ、男性名の Joseba や Iñaki、女性名の Gotzone や Edurne などは、今日でもその使用が確認される。

スペイン内戦中の 1938 年 8 月 12 日に発せられた司法省令 Orden は、カスティーリャ語以外の言語や方言による戸籍簿 Registro Civil への登記を禁じた。実際、例えば上述の Iñaki は、Ignacio に変更させられたのである。その後、1957 年の「戸籍簿法 Ley sobre el Registro Civil」も同様の言語規制を設け、併せて性別上の誤認を招きかねない人名の登記を禁じた。他方で、バスク語復権運動が高揚した 1960 年代には、バスク語アカデミー（1919 年創設）を中心にバスク語人名の一覧作成が始まり、ホセ・マリア・サトルステギ Jose Maria Satrustegi の小冊『バスク語人名一覧』（1972 年）に結実した<sup>3</sup>。この時採録された人名は、ほぼ宗教上・歴史上の人物に由来しており、性別区分に疑義が生じることは稀であった。

フランコ独裁崩壊後は、1977 年の法改正を受けてカスティーリャ語以外の言語による人名登記が容認されたが、性別同定の規程はそのまま残った。かたや『バスク語人名一覧』は、1977 年と 1983 年に版を重ね、内容を拡充させた 2001 年版<sup>4</sup>でもって 1 つの節目を刻む。もっとも、バスク語人名の性別区分がバスク社会で論議を呼ぶのはこの時ではなく、1957 年の戸籍簿法の 2011 年改正に合わせて、アカデミーが新たな性別人名一覧を公開した時からであった。

じつはバスク社会では、普通名詞や地名を人名に用いることが 1980 年代より流行し、現在に至る。2001 年の人名一覧は、そうした傾向をいくぶん反映していたが、その後 10 年の間に登記された新たな人名を網羅していない。バスク語には文法上の性がないため、とりわけ普通名詞を人名として用いる場合、男女のどちらにその名詞をあてがうかは、この間、親によってまちまちだったのである。

2011 年の新たな人名一覧をめぐる争点は 2 つあった。1 つは、性別区分ルールと命名慣行のずれである。この新たな性別人名一覧は、おおよそ以下のルールに則っていた<sup>5</sup>。① -a, -e で終わる普通名詞と地名は、人名においては女性名とし、-i, -o, -u ないし子音で終わるものは男性名とする。② 男性名に -a を付して女性名とする。③ -a で終わる歴史上の男性名や、アラナが列挙した人名の性別は、これを尊重する。④ 聖母マリア礼拝堂の置かれている土地の地名は女性名とする。

ところが、例えば《夢》を意味する人名 Amets は、従来女性よりも男性に対して用いられていたのに、上記のルールに反して、女性名に分類された。また例えば《大地》を意

味する Lur は、アカデミー自身が当初男性名に分類していた。それが 2001 年以降女性名に分類し直されたのは、Lur がバスク神話上の大地の女神（女性の精霊）の名前だからかもしれないが、この女神の 2 人の娘の名前でもある Eguzki 《太陽》と Ilargi 《月》は、前者が男性名に、後者が女性名にそれぞれ分類されたままで、その理由も判然としないのである。

もう 1 つの論点は、性別二分法の是非に関わる。2000 年代以降のスペインでは、2007 年のいわゆる「ジェンダー・アイデンティティ法<sup>6</sup>」の制定など、性自認のあり方が問い直され始めていた。こうした風潮の下、アカデミーは、バスク語人名に第 3 の性としての「中性名 *izen neutroak*」という範疇はない、という立場を堅持しつつ、男性名/女性名の枠組みを当てはめない「通性名 *izen epizenoak*」の範疇を、2019 年に新設したのであった。

こうして上述の Amets は通性名へと変更されたが、Lur は女性名のままである。また、地名由来の人名の多くが通性名に分類されたが、マリア信仰と無関係の地名の Izaro が女性名とされるなど、例外が依然存在する。このほか、男性名から女性名を派生させる命名法への批判や、普通名詞のうち、「文化」との関連性が高い名詞を男性名に、「自然」との関連性が高い名詞を女性名にそれぞれ適用する傾向に対する根強い違和感も、ジェンダー平等の観点から表明されている。

なお、2011 年に改正された戸籍簿法は 2020 年代に入って修正され、命名に際して人名と性的自認の一対一対応は問われなくなった。性別を依然区分するバスク語アカデミーの人名一覧に法的拘束力はない。とはいえ、その社会的影響力は大きい。現に市町村役場の戸籍簿担当部署では、この一覧がしばしば参照されている。アカデミーは、行政当局に対して柔軟な対応を求めつつ、自らは学術的な見地から社会の慣用や要請を尊重すると積出し、すべてのバスク語人名が通性名に一本化され得る将来の可能性も否定はしていない。

2024 年 9 月現在、2,100 の女性名、2,483 の男性名、491 の通性名がバスク語アカデミーの人名一覧に列挙されている<sup>7</sup>。今後の推移を注視したい。

---

1 このほかの例として、①話し手の性別によって親族名称の一部が異なる現象、②話し手の発話文の（助）動詞活用の中に、聞き手の性別標識が現れるアロキュティヴィティ *allocutivity* 現象などがある。

2 サビン・アラナ(Sabin Arana)とも。彼のバスク語聖人名一覧は、同志の協力を得て、死後出版された。Eleizalde, Koldo; Arana Goiri, Sabin: *Deun-ixendegi euzkotarra edo deunen ixenak euzkeratuta*, Bilbo, 1910.

3 Satrustegi, Jose Maria: *Euskal izendegia*, Iruñea, Banco de Vasconia, 1972.

4 Euskaltzaindia: *Euskal izendegia. Ponte izendegia*. Eusko Jaurlaritzza, Vitoria-Gasteiz, 2001.

5 Eskisabel, Idurre: “Izena eta izana, euskal izendegia eta sexuaren araberako bereizketa” *Jakin* 202. zk., 45-74, 2014.

6 LEY 3/2007, de 15 de marzo, reguladora de la rectificación registral de la mención relativa al sexo de las personas.

7 <https://bit.ly/4fKUfl2>（最終アクセス：2024 年 9 月 7 日）

（はぎお・しょう 東京外国語大学教授）

## 【エッセイ 2】

La nueva figura de «Coordinador del apoyo a los extranjeros» de la Agencia de Servicios de Inmigración: ¿Un paso hacia la integración de los inmigrantes en Japón?

Lluís VALLS CAMPÀ

Ante el reciente aumento de residentes extranjeros, y especialmente del que se espera en un futuro próximo, desde 2022 el gobierno japonés está implementando su *Hoja de Ruta* para convertir la sociedad japonesa en una «sociedad de convivencia armoniosa con los extranjeros». En esta sociedad, tanto los residentes autóctonos como los foráneos podrían vivir juntos de forma segura y sintiéndose cómodos, podrían participar en la sociedad ejercitando plenamente sus habilidades, no existirían prejuicios ni discriminación y se respetarían los derechos humanos de todos (Committee on Approaches to the Training of Support Coordinator for Foreign Nationals, 2024).

Una de las medidas para avanzar hacia ese objetivo es el establecimiento de un certificado de «Coordinador del apoyo a los extranjeros» por parte de la Agencia de Servicios de Inmigración. Este certificado reconocerá a profesionales de oficinas de la administración pública que proporcionan información a los residentes extranjeros, y de otras organizaciones que lo hacen por encargo de esas, como expertos en consultoría para residentes extranjeros para prevenir y resolver problemas de su vida diaria, social y laboral. El Coordinador, además de proporcionar información, aconsejará al usuario y coordinará diferentes profesionales de la administración para atenderlo a lo largo del proceso de resolución del problema consultado. Para conseguir el certificado deberán tener un año de experiencia profesional en información para residentes extranjeros, realizar un curso de formación de seis meses (el primero desde agosto de este año) y superar una serie de pruebas (Committee on Approaches to the Training of Support Coordinator for Foreign Nationals, 2024).

Creemos que, si los Coordinadores disponen de los recursos necesarios y se hacen realmente responsables del acompañamiento de sus usuarios hasta la resolución de los problemas que enfrentan, pueden contribuir a que estos superen barreras que encuentran para integrarse en la sociedad japonesa debido a la lengua y al desconocimiento y la dificultad de los trámites administrativos y, así, pueden contribuir al cumplimiento de los derechos a servicios públicos y de las obligaciones como ciudadanos de los inmigrantes.

Por otro lado, en la enseñanza de lenguas extranjeras se ha definido el concepto de «mediador intercultural» como la persona que usa sus competencias en lenguas extranjeras y sus habilidades y conocimientos interculturales para apoyar una comunicación e interacción satisfactorias entre personas de diferentes lenguas y culturas (Byram, 1997). En el campo de la integración social, los mediadores interculturales realizan sus actividades como técnicos de las administraciones públicas, escuelas y ONG. En España, en los últimos años ha aumentado la presencia de mediadores interculturales y los cursos universitarios que los certifican oficialmente. Si contrastamos las figuras de mediador intercultural y de Coordinador, encontramos algunas carencias que limitan las posibilidades de este de promover la integración de los residentes extranjeros en Japón.

En primer lugar, las actividades de un mediador se dirigen tanto a la población foránea

como a la autóctona, buscando una mutua comprensión y aceptación, lo cual implica cambios cognitivos y actitudinales en ambas partes. Sin embargo, las actividades de los Coordinadores van dirigidas básicamente a la población extranjera, buscando su adaptación a las normas y reglas locales y su acceso a los servicios públicos y se ignora la necesidad de actuar también sobre la población autóctona.

En segundo lugar, un mediador se desplaza a la comunidad y actúa sobre relaciones interpersonales —en una escuela, un barrio, un hospital, una empresa, etc.— dialogando con las diferentes personas implicadas en la relación intercultural e implementando acciones dirigidas a las mismas. Por otro lado, el Coordinador desarrolla sus actividades a nivel administrativo centrándose en la provisión de información y consejos y en la búsqueda y coordinación de los servicios que el usuario necesite para resolver su problema y no se desplaza al entorno real del usuario.

Finalmente, las principales herramientas de un mediador intercultural son sus conocimientos sobre las diferentes culturas y las relaciones interculturales, sus habilidades para relacionar aspectos de diferentes culturas, conseguir nuevos conocimientos culturales, identificar y resolver malentendidos, negociar con personas de otras culturas formas de relacionarse satisfactorias para todos los interlocutores y usar todas estas capacidades para apoyar las relaciones entre personas de diferentes culturas. Sin embargo, el currículo de los cursos de formación de los Coordinadores adopta la postura opuesta y considera como herramienta principal los conocimientos sobre los servicios públicos y los trámites necesarios para acceder a los mismos, mientras que la formación intercultural ocupa un papel complementario. Por ejemplo, de los 6 bloques teóricos del curso, solo uno trata sobre el conocimiento intercultural y lo hace a nivel «general» (véase Committee on the Formulation of a Curriculum for Training Support Coordinator for Foreign Nationals, 2024).

En definitiva, los Coordinadores pueden aportar una mejora en el acceso a los servicios públicos y, con ello, en las vidas de los inmigrantes, especialmente de los que disponen de menor competencia en japonés y acceso a la información. Pero, si su papel no se amplía para incluir la mediación intercultural, poco van a contribuir a la inclusión de los inmigrantes como miembros de una sociedad japonesa multicultural con relaciones interculturales fluidas y satisfactorias.

### **Referencias bibliográficas**

Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Multilingual Matters.

Committee on Approaches to the Training of Support Coordinator for Foreign Nationals (2024). *Approaches to the Training of Support Coordinator for Foreign Nationals. Report on Discussions*. Ministry of Justice.

Committee on the Formulation of a Curriculum for Training Support Coordinator for Foreign Nationals (2024). *Curriculum for the Training Program for Support Coordinator for Foreign Nationals. Report on Discussions*. Ministry of Justice.

(ユイス・バユス=カンパ 京都外国語大学教授)

## 【書評 1】

Olga Anokhina y Aurelia Arcocha (eds.), *Creación, traducción, autotraducción*,  
Bilbo / Madrid-Frankfurt: Euskaltzaindia / Iberoamericana Vetvuert, 2023

金子 奈美

作家が自作を翻訳することを「自己翻訳」*autotraducción* と呼ぶ。自己翻訳についての研究は、ベケットやナボコフといったいわゆる越境的で、英語や仏語などの大言語を股にかけて創作した著名作家を対象に始まり、スペイン語圏では、カブレラ=インファンテ、アリエル・ドルフマン、ホルヘ・センプルンなどが類似の例として挙げられる。

だが、自己翻訳は必ずしも越境的なものではない。フランコ独裁からの民政移管を経て、カタルーニャ語、ガリシア語、バスク語といった地域語による文芸創作が活発化した現代スペインでは、スペイン語と地域語の二言語併用を背景に、他の多くの文学においては珍しい自己翻訳の現象がかなり頻発する。そのため、2000年代以降に勃興した国際的な自己翻訳研究では、上記の地域語を背景に持つ研究者たちが少数言語文学における事例を数多く分析し、自己翻訳の理論化に大きく寄与してきた。

本書は、そうしたスペインの文脈における自己翻訳研究の成果を踏まえつつ、フランスで成立した生成論のアプローチを導入することで、複数言語地域の文学・翻訳研究をさらに深化させようとするものだ。生成論が扱ってきた構想メモや草稿などの「前-テキスト」は、複数言語作家の創作・翻訳の複雑な実態を解明する鍵となることが期待される。

本書はまた、バスク語アカデミーの創立百周年を祝した刊行物でもあるが、取り上げられるのはバスクやスペイン国内のケースに留まらない。マヌエル・プイグ(アルゼンチン)、アロルド・ヂ・カンポス(ブラジル)といったラテンアメリカの作家の事例も盛り込まれており、マヤ語などの先住民言語による文学と翻訳を考えるためにも、本書に収められたスペイン国内の事例研究は参考になるだろう。

編者は、パリの近代テキスト草稿研究所で「多言語使用・翻訳・創作」研究グループを率いる Olga Anokhina と、同グループで活動してきたボルドー・モンテーニュ大学名誉教授、かつバスク語作家としてアカデミー会員でもある Aurelia Arcocha である。

内容は3部構成で、12の論考が収録されている。第1部“*Creación, traducción y multilingüismo en literatura: enfoque genético*”の冒頭を飾るのは、編者の Olga Anokhina の論文で、複数言語作家の創作過程をめぐる彼女の研究の概要を、初めてスペイン語で紹介したものである。複数言語作家の言語使用の戦略が、①機能的使い分け、②コード・スイッチング、③二言語同時執筆、④自己翻訳などに分類され、作家の草稿がいかにかその実像をありありと浮かび上がらせてくれるかがカラー図版を交えて示される。続く Patrick Hersant の論考は、作家と翻訳者の協働関係を取り上げる。作家が残す資料に対して翻訳者の資料(手紙、インタビュー、翻訳の草稿など)は保存・公開されることが少ないが、文芸翻訳の過程がいかなるものか、作者が自作の翻訳に関わることは望ましいのか(自己翻訳にも通じる問い)を知るのに欠かせないものであることがわかる。マヌエル・プイグの事例を扱った Delfina Cabrera は、草稿分析を通じて、刊行されたスペイン語テキストの背後に隠れたプイグの創作過程の多言語性を明らかにする。プイグ特有の言語観や、英語やイタリア語など複数言語が進む草稿が次々と開示されていくさまはスリリングで、作家の既存のイメージが覆される。M. Hidalgo Nacher の論文は、ブラジルの詩人・批評家・翻

訳家であったアロルド・ヂ・カンポスの蔵書（36 言語で書かれた 70 近くの国・地域の書物）から、彼の活動を支えた国際的な知のネットワークを再構築している。

第 2 部 “Traducción, autotraducción y estrategias de escritura en el ámbito literario hispánico” には、バスク語で書いた作品の多くを（主に共訳で）スペイン語へ自己翻訳してきた作家ベルナルド・アチャガが、二言語の間で書き、翻訳することについて当事者として語った講演録のほか、今日の代表的な自己翻訳研究者の論考が並ぶ。現代スペインにおける自己翻訳とその特徴について概観したい向きには、まず Eva Gentes と Rainer Grutman の論文にあたることを勧める。前者には各地域語文学の概要も含まれているが、いずれの地域でも二言語で創作する作家は少なく、地域語で執筆してスペイン語に自己翻訳する作家が多いことがわかる。これは、Grutman の用語では「内因的」バイリンガリズムに基づく「上昇型」自己翻訳とされ、同一の国家・地域内における非対称な言語関係に起因する、構造的かつ集団的な現象である。きわめて稀な「下降型」自己翻訳の例では、『パスクアル・ドゥアルテの家族』をガリシア語に自己翻訳しようとしたカミロ・ホセ・セラの挫折が紹介されている。Christian Lagarde は、あえて（自己）翻訳しないという選択＝無翻訳について、20 世紀オック語文学の例から考察している。

第 3 部 “Euskara y traducción literaria en el espacio contemporáneo” には、バスク語文学研究者たちの論考が集められている。M. J. Olaziregi は、翻訳研究がもたらす複数言語的な視点がスペイン文学研究にとって益々必要となっていると強調するとともに、スペイン国内の非対称な言語関係がバスク語作家に及ぼす影響について論じている。バスク語のような少数言語で書く作家は、遅かれ早かれ、スペイン語のような支配的言語にどのように翻訳する／されるかという問題に直面する。そこで特に近年、バスク語からスペイン語への翻訳があたかもスペイン語で書かれた作品のように扱われ、原語の存在がかき消される「同化」に抗して、バスク語作家たち自身によって新たな翻訳戦略が取られつつあるという指摘が注目される。残る 3 つの論考は個別のバスク語作家に関するもので、特にアチャガの小説『アコーディオン弾きの息子』（2003 年）が示す際立った複数言語性がスペイン語ほかの欧米の諸言語にいかにも翻訳されたかを分析した Elizabete Manterola の論考は、この作品の邦訳と比較しながら読むとより興味深いだろう。

最後の Aurelia Arcocha の論文は、バスク語作家の自己翻訳の生成論的研究がまだほとんど手付かずであると言ってよい、バスク語文学・翻訳研究の大きな課題を明示するものとなっている。そのなかで言及されるバスク語作家 Eider Rodríguez は、「自分の中では二つの言語 [引用者注：バスク語とスペイン語] がなんとか共存しているが、外では闘争状態にある」と述べている。そのような複数言語で生き、書くことのとてつもない複雑さと、その実像に迫る生成論的アプローチの可能性を存分に感じさせてくれる論集である。

（かねこ・なみ 慶應義塾大学助教）

## 【書評 2】

Jordi Pujol y Ko Tazawa, *La última conversación. Encuentro en Queraltbs*,  
Barcelona: Lapsilatzuli Editorial, 2023

福嶋 教隆

本書は、カタルーニャ自治州政府元首相ジョルディ・プジョル氏と法政大学名誉教授、故 田澤耕氏が 2022 年 7 月 16 日にケラルプス村でおこなった対談の記録である。ケラルプスはカタルーニャ州のピレネー山麓にある、人口わずか 200 人ほどの村だが、田澤氏一家はここで夏を過ごすのを常としていた。この村に別荘を持つプジョル氏が首相在任のころから、両氏は親しくなり、互いの人間性と文化的教養に惹かれて、30 余年に及ぶ家族ぐるみの友情をはぐくんできた。

ラピスラズリ出版社<sup>1)</sup> のジョン・ロペス・デ・ビニャスプレ (Jon López de Viñaspre) 氏は、プジョル氏と田澤氏が交わす会話を記録にとどめようと考え、この対談を企画した。対談は、村内の田澤氏宅で、ロペス氏及び田澤佳子博士<sup>2)</sup> の立ち合いのもと、日本とカタルーニャの諸問題について 4 時間にわたっておこなわれた。使用言語はカタルーニャ語だった。ロペス氏がそれをスペイン語に訳し、2023 年 1 月に出版したのが本書である。同年 3 月にはカタルーニャ語版 *L'última conversa. Trobada a Queraltbs* も刊行された。

本書は A5 版 108 ページからなる。ロペス氏が序文で、本書誕生の経緯を説明した後、田澤氏がプジョル氏の一家との交流について語る。続いて 10 の章から成る対談が展開する。雄弁で知られるプジョル氏に劣らぬほど、田澤氏も積極的に意見を開陳する。両氏は、相手に親しみと敬意をこめて、敬称 *vostè* (*usted*) を用いて話すのを常としている。

① 「開始のあいさつ」。

② 「世界の中の日本」。明治維新、その後の日本と諸外国との戦争、復興などが話題になる。3 度の訪日経験のあるプジョル氏の日本観がよく示されている。

③ 「エネルギー問題」。原子力発電の危険性、風力発電の限界などが論じられる。

④ 「戦争犯罪」。ドイツと日本の第 2 次世界大戦の敗戦処理の違いについて議論が交わされる<sup>3)</sup>。

⑤ 「政治家の人間としての器」。田澤氏が世襲政治家の問題を論じ、プジョル氏がドイツのアンゲラ・メルケル元首相について語る。

⑥ 「名誉、宗教、恥」。カタルーニャの人々は *eina i feina* (「道具と労働」。歴史学者 J. ビセンス・ビベスの言葉) を重んじる、勤勉な民であることが語られる。田澤氏は、氏がカタルーニャ語に翻訳した森鷗外の『阿部一族』を例にあげ、日本の切腹について説明する。

⑦ 「言語とアイデンティティ」。この対談の中核と言える章である。田澤氏が「日本では日本語が公用語であることが自明なので、憲法に公用語の規定がない」と切り出し、プジョル氏が「それとは逆に、カタルーニャにとっては言語の問題が極めて重要だ」と応じる。1978 年憲法制定の際、公用語に関する条文をめぐるプジョル氏らがスペイン政府とおこなった駆け引きの様子が、当事者自らの口から語られる (pp. 72-75)。「ある民のアイデンティティは香水にたとえることができる。香水は容器に入れなければ揮発してしまう。アイデンティティは政治や制度で守らなければ保たれない」というプジョル氏の言葉 (p. 84) は特筆に値する。

⑧「聖ジョルディ十字勲章」。田澤氏は、カタルーニャ・日本間の文化的懸け橋としての功績を評価されて、2003年にカタルーニャ自治州政府から *Creu de Sant Jordi* を贈られた。ここではその経緯が語られる。

⑨「料理」。プジョル氏が神戸ビーフを気に入ったことなどが述べられる。

⑩「終わりのあいさつ」。

そして対談後の食事や、別れの記述で、本書は結ばれる。

対談の時点でプジョル氏は92歳、田澤氏は68歳だったが、田澤氏は本書の上梓を待たず、2022年9月24日、世を去った。享年69歳。表題どおり、この対談は両氏の最後の出会いとなった。なお、プジョル氏は2024年8月5日現在、存命である。

田澤氏は、①カタルーニャの言語、文学、文化を日本に紹介し(『カタルーニャ語辞典』、大学書林、2002、『ティラン・ロ・ブラン』、岩波書店、2007; 2016-2017、『物語 カタルーニャの歴史』、中央公論新社、2000; 2019など)、②日本の言語、文学、文化をカタルーニャ語で紹介した(注1に記した翻訳や *Catalunya i un japonès*, Barcelona: La Campana, 1993など)<sup>4)</sup>。まもなく上梓予定の *Diccionari japonès-català / català-japonès*, Barcelona: Enciclopedia Catalana が最後の業績となる。

このように多大な学術貢献を果たした田澤氏が、カタルーニャ政界の巨人プジョル氏と語り合うという、得難い場面を提供してくれる本書の意義は計り知れない。この対談の一部は動画で公開されているので、ぜひ視聴されたい ([Contacte - Lapislàtzuli Editorial \(lapislatzuli.com\)](https://www.lapislatzuli.com))。

#### 注

- 1) 日本文学のカタルーニャ語訳 (2015年の樋口一葉『たけくらべ』、森鷗外の『阿部一族』から2021年の太宰治『人間失格』まで10点) など、多くの田澤氏の著作がこの出版社から刊行されている。
- 2) 田澤耕氏夫人。スペイン語圏への日本の俳句の紹介、及びスペイン語圏の俳句の研究における第一人者の1人。近著に *El haiku en la poesía española y catalana del siglo XX. Como una ballesta en el aire azul* (2024, Barcelona: Ediciones Invisibles)。なお、この副題はA. マチャドがコウノトリを歌った俳句的な詩の部分「一本の大弓のように／青い大気の中」(田澤佳子氏訳)である。出版社の判断により、この副題とともに、コウノトリではなくカワセミの絵(江戸時代の南画家、長町竹石 画)が表紙を飾っているのは、評価の分かれるところであろう。
- 3) なお、プジョル氏は“ *juzgaron y asesinaron al general Hideki Tojo como responsable de muchos de estos crímenes*” (pp. 49-50) と述べているが、極東国際軍事裁判に基づいて刑が執行された事態の描写としては、動詞の選択に問題があると思われる。
- 4) 田澤氏の著作『〈辞書屋〉列伝 一言葉に憑かれた人びと』(中央公論新社、2014)は、M. モリネールの *Diccionario del uso de español* の価値を広く知らしめる名著だが、1つだけ誤りを指摘しておきたい。同書では、1979年の時点において「当時、西和辞典は高橋正武の『西和辞典』(白水社)しかなかった。和西辞典はまだ出ていなかったと思う」(p. 235)と書かれているが、西和、和西ともにすでに数々の辞書が世に出ている(金沢一郎(1923)『和西辞典』、村岡玄(1927)『西和辞典』、J. カルボ(1937)『日西

大辞典』、田井佳太郎（1964）『和西大辞典』など）。また、1979年には宮城昇・他『和西辞典』などが出た。

（ふくしま・のりたか 神戸市外国語大学名誉教授）

### 【書評3】

Nuria Aranda García (ed.), *Libro de los siete sabios de Roma* (Colección Instituto de Literatura y Traducción 38: Biblioteca de Literatura Sapiencial 4), Centro Internacional de Investigación de la Lengua Española, San Millán de Cogolla, 2023. 299 páginas.

小川 佳章

Zaragoza 大学の俊英 Nuria Aranda García が、積年の研究成果に基づく *Libro de los siete sabios de Roma*（以下、*Siete sabios*）の校訂版（以下、「本書」）を完成した。*Siete sabios* は *Sendeban*（別名 *Libro de los engaños*）に代表される説話群の西方系統に属し、より正確にはそのカステーリャ語版を指す。つまり、ラテン語版の *Liber de septem sapientibus* やフランス語版である *Roman des Sept Sages* とは広義の「親子」関係を有する（本書 26 ページ）。

*Siete sabios* では、元来インド起源ともペルシャ起源とも言われる説話集の舞台がローマになっている。また、東方系の説話集では、その枠物語において王がハレムを持っており、最も愛した妃との間に一人息子を授かるのだが、王子が長じたころにはその妃が退場しており（亡くなったのか、単に寵愛を失ったのかは不明）、新たに王の寵愛を得た継母が王子を唆して王を亡き者にしようと図り、王子が拒絶すると、彼に暴行されそうになったと王に讒言する。沈黙の誓いを立てている王子に代わって王子を弁護しようとする王の顧問団 (*los sabios*) と、王子を処刑させようとする継母とがそれぞれ、たとえ話によって王を説得しようとする。

一方 *Siete sabios* では、登場人物が東洋の異教徒の君主ではなく、ローマ皇帝 Ponciano とその息子 Diocleciano であり、皇帝はローマ式に一夫一婦制を取っているらしく、皇子の実母の臨終が描かれてから、悪辣な継母の登場となる。また収録されている説話も東西分裂の結果相当異なっており、東方系を代表する *Sendeban* の 23 話と本書の 22 話のうち、共通するものは 4 話にすぎない（本書 23 ページ）。

では本校訂版の特色を紹介することにしよう。Zaragoza の Hurus 兄弟の工房で 1490 年頃に作られた版を嚆矢として、そこから 19 世紀までの間に、確認されているだけで 24 種の *Siete sabios* の印刷本が出回ったが、Aranda García はその全てを精査したうえで 1530 年 Burgos 版を底本に選び（本書 52 ページ）、他版との厳密な校合作業の上にこの説話集のテキストを確定した。その精密ぶりは、本書のいずれかのページを一瞥するだけで明らかであり、ほぼ 1 行ごとに現れる異読について、前述の Zaragoza 版を除く 23 種類のテキストを突き合わせて本文を確定していくのである。いわゆる古典的テキストの校訂者としては当然の姿勢かもしれないが、実際には想像を絶する作業量であり、これを博士課程在学中という限られた時間で成し遂げた生産性の高さには、脱帽するばかりだ。

なお、彼女はこの校訂作業の成果を *Los Siete sabios de Roma en España: una historia*

*editorial a través del tiempo...* (Zaragoza, 2021)として、すでに世に問うており、この研究によって Zaragoza 大学から博士号を受けている。

さて、この種のテキストを校訂するという作業は、必然的に文献学・書誌学・(比較)説話学などの分野を横断することになるが、説話学的な側面にも十分な目配りがなされている。すなわち、F. Tubach, *Index Exemplorum: A Handbook of Medieval Religious Tales* (Helsinki, 1969)に準拠しつつ、各説話の類話や影響関係が完結に説明され、各説話(モチーフ)に特化した文献案内が付されている(275-299 ページ)。また *Siete sabios* 全体に関する文献表は 55-61 ページに掲載されている。簡潔にして要を得ており、これから西方系テキストの勉強に取り掛かる若い研究者にとって、最高の道しるべである。

この画期的な仕事は、編者の指導教授であった María Jesús Lacarra 先生に捧げられている。Lacarra 氏が校訂した *Sendebarr* や *Calila e Dimna* (夫である Juan Manuel Cacho Blecua 先生との共編)のテキストがそうであるように、Aranda García 氏の仕事が今後 *Siete sabios* 研究において参照すべき標準テキストとなって行くだろう。

(おがわ・よしのり 立教大学外国語教育研究センター)

## 【著書紹介】

青山和夫・井上幸孝・坂井正人・大平秀一

『古代アメリカ文明——マヤ・アステカ・ナスカ・インカの実像』

(講談社現代新書, 2023)

井上 幸孝

西洋との接触以前のアメリカ大陸では、1 万年以上前にベーリンジア(現在のベーリング海峡)を越えて到達・拡散した人類(ホモ・サピエンス)が独自の文明や文化を開花させた。なかでも、イスマノアメリカに含まれる二つの地域(北米南部から中米にかけてのメソアメリカ、南米の太平洋岸からアンデス高地にかけてのアンデス)では、いわゆる四大文明に比肩する文明が発展した。本書は、メソアメリカ文明に含まれるマヤとアステカ、アンデス文明のナスカとインカという、日本の読者にもその名が比較的良好に知られている4つの社会や文化について、それぞれを専門する研究者が分担して執筆した新書である。

全体の序とまとめ、およびマヤについては編者の青山、ナスカの章は坂井、インカについては大平が担当し、本稿の筆者である井上はアステカの章を執筆した。各章はこれまでに存在した概説書を焼き直したり単にまとめ直したりしたものと言うわけではない。筆者はアステカ王国の中心都市の一つであったテノチティトランにおいて、モニュメントがいかに「見せる」ように機能していたのか、さらにはメシーカ人のイデオロギーがこの都市にどう反映されているのかについて考察を試みた。また、固有の文字と書物を有したアステカの人々にとって、絵文書がどのように変容していったのかについて、スペイン征服後のアルファベット文書への移行を含めて論じた。

本書がこのような形をとったのには、研究の進展という背景がある。考古学調査では年々新しい知見が得られ、新たな遺跡や遺構の発見、出土品の分析が進んでいる。筆者の専門は歴史学だが、アステカやインカに関する歴史研究も日進月歩である。数十年前と比

べるとはるかに多様な事象が明らかになっていたり、かつては議論の俎上にすら乗らなかった事柄が学術的な議論や見直しの対象となっていたりする。無論、筆者の力量が許す限りにおいてはあるものの、拙章は、一般読者を意識しつつ、そうした新たな情報や観点を意識して執筆したものである。

こうした研究の進展は、個人の研究成果だけでなく、様々なプロジェクトが結果を残してきたことによる。そうしたプロジェクトの一つの例として、本書の編者である青山が領域代表者を務めた科研費新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（2014～18年度）があり、本書の4人の執筆者はいずれもこの共同研究のメンバーであった。科研プロジェクトの終了後、コロナ禍を挟んで諸事情からいくらか時間がかかったものの、ようやく昨年出版に至った。

2023年という本書の出版のタイミングには、もう一つ背景となる出来事があった。昨年から今年にかけて日本国内で開催された特別展「古代メキシコ——マヤ、アステカ、テオティワカン」である。同展は、東京・上野の東京国立博物館（会期：2023年6月16日～9月3日）、福岡の九州国立博物館（2023年10月3日～12月10日）、大阪・中之島の国立国際美術館（2024年2月6日～5月6日）の3か所を巡回した。この特別展は既に閉幕したが、ご覧になった会員も多いことであろう。

この特別展には、メキシコ国立人類学博物館（Museo Nacional de Antropología）やテンプロ・マヨール博物館（Museo del Templo Mayor）といった博物館が所蔵するものに加え、チアパス州パレンケ遺跡併設の博物館で展示されている「赤の女王（Reina Roja）」などが集められ、メキシコ国内にいても簡単に見られるわけではないような充実の展示内容であった。この特別展の詳細については公式図録が制作されており、筆者も翻訳や執筆に携わったので、機会があればお目通しいただきたい。

私自身、この特別展のおかげで様々な経験をすることができた。特別展に関わる雑誌への寄稿や記事の監修の機会、勤務先の専修大学で古代メキシコに関する一般向けの公開講座の開催やメソアメリカ文明史の専門科目の担当のほか、展示会場で解説の機会も持つこともできた。専修大学国際コミュニケーション学部の学生（東京会場）、非常勤先の大阪大学外国語学部の学生（大阪会場）といったラテンアメリカの歴史・文化の科目を履修する学生たちに解説をすることができたのはいい思い出となった。

『古代アメリカ文明』を読んでいただければわかるように、メソアメリカとアンデスというアメリカ大陸の「二大文明」は混同されることもあるが、黄河とインダスが異なるのと同じように異なる文明圏である。しかも、文明の発祥からヨーロッパ人の侵略を受けるまで何千年にもわたってそれぞれの文明圏で多くの文化や国家が興亡した。ともにメソアメリカで栄えたアステカとマヤだけでも、一括りに論じるのは容易ではない。筆者の専門であるメキシコは、地理的には北米であるにもかかわらず、日本ではまだまだ「中米」や「南米」などと誤解を受けることも多い。また、本書にも記したように、「人身御供ばかり行っていた社会」のような偏ったアステカ観も根強い。本書がその理解を少しでも深める一助になれば幸いであると願うとともに、今後も新たな成果を発信できるよう研究を続けていきたいと思う。

（いのうえ・ゆきたか 専修大学国際コミュニケーション学部教授）

## 【学会等報告 1】

### 33.º Congreso Internacional de ASELE

Juan Carlos MOYANO LÓPEZ

El 33.º Congreso Internacional de ASELE se celebró en la Universidad de Burgos (España), del 29 de agosto al 2 de septiembre de 2023 en torno al tema *Interacción, discurso y tecnología en la enseñanza del español LE/L2/LH* y tuvo a Japón como país invitado. Contó con la participación de un total de 400 asistentes, procedentes de 40 países y 4 continentes, siendo Japón uno de los países que aportó más asistentes con cerca de 40 profesores e investigadores de 20 universidades japonesas. Números redondos que certifican el éxito del congreso y la buena salud de la que goza la investigación en torno a la lengua española en todo el mundo y especialmente en Japón.

El 29 de agosto por la tarde, como aperitivo previo al congreso y en colaboración con la Dirección General del Español en el Mundo, se celebró la jornada titulada *El español en Asia: China, Corea, Filipinas, La India y Japón*, en el Palacio de los Condestables de Castilla (Burgos), con la presencia de más de 200 asistentes y con la participación de cinco especialistas de países estratégicos para la enseñanza del español, entre los que destacamos de forma especial a la catedrática de la Universidad Sofía, Yoshimi Hiroyasu. Esta primera jornada tuvo la intervención inaugural de Luis García Montero, director del Instituto Cervantes, cuya defensa del español como *lengua de prestigio* y sus palabras sobre los profesores de español, los cuales "somos mucho más que los jornaleros del subjuntivo; somos los que intentamos enseñar un idioma que sirve para abrir las identidades y para crear un mundo más justo y más dialogante" se llevó el aplauso de todo el auditorio. Cerró esta primera jornada una de las dos invitadas de honor con las que contó el congreso, Rosa María Calaf, periodista y reconocida corresponsal con casi 40 años de experiencia, quien nos habló de *El oficio de comunicar en español*.

El miércoles 30 de agosto, tras la inauguración oficial en el Paraninfo del Hospital del Rey (Universidad de Burgos), se procedió a la firma del convenio de colaboración entre ASELE y CANELA, cuyos respectivos presidentes, Javier Muñoz-Basols y Yoshimi Hiroyasu, resaltaron la importancia de los investigadores que realizamos nuestra labor en Japón, país que después de España más socios aporta a ASELE junto con Italia, con un total de 32. CANELA ha sido reconocida en 2024 como uno de los miembros colaboradores de carácter académico del Consejo Científico de Japón (Nihon Gakujutsu Kaigi Kyoryoku Gakujutsu Kenkyu Dantai, 日本学会議協力学術団体).

Durante los tres días del congreso, hubo cerca de 200 comunicaciones, talleres, conferencias y comunicaciones institucionales donde los asistentes pudieron compartir y debatir sobre las diferentes y muy interesantes investigaciones que se están realizando en todo el mundo sobre la enseñanza y el aprendizaje del español. De todas ellas nos gustaría destacar la conferencia plenaria dictada por Yuko Morimoto (Universidad Carlos III de Madrid), con el título *Español y japonés: cercanías y distancias*; la presentación institucional a cargo de Juan Carlos Moyano López (Universidad Seisen), Yoshimi Hiroyasu (Universidad Sofía) y Ángela Yamaura (Universidad Chuo) con el título *Situación actual de la enseñanza de ELE en las universidades*

*japonesas y perspectivas de futuro*; y las comunicaciones realizadas por 30 profesores que actualmente desempeñan su labor en Japón, más de la mitad de ellos de nacionalidad japonesa.

La conferencia de clausura, titulada *Inspiración y disciplina*, estuvo a cargo de otra gran invitada de honor, la escritora Elvira Lindo, y tuvo lugar en el patio de butacas del Teatro Principal de Burgos, un precioso teatro de mediados del siglo XIX, tras la cual se pasó a la clausura oficial del congreso y al brindis de despedida en el Salón Rojo de este mismo teatro. Durante los días del congreso se pudo disfrutar también de diferentes actividades de carácter social, entre las que destacamos la cena social en el Restaurante "La Finca", del Hotel Palacio de los Blasones, un paseo nocturno por Burgos, y la visita al Yacimiento de Atapuerca el sábado 2 de septiembre.

Nos unimos desde estas líneas a la gran cantidad de felicitaciones recibidas por el comité organizador, encabezado por Raúl Urbina Fonturbel, y a todo el equipo directivo de ASELE, especialmente a su presidente Javier Muñoz-Basols. Sin duda, el gran esfuerzo y dedicación empleados tanto por los miembros del comité como por los alumnos ayudantes de la Universidad de Burgos, así como el cariño y la atención personalizada a todos los invitados y asistentes, hicieron, junto con la calidad de las comunicaciones, que el 33º Congreso Internacional de ASELE fuera un completo éxito.

En la Asamblea General del día 1 de septiembre se aprobó la celebración del 34º Congreso en la Universidad de Edimburgo (Reino Unido) del 16 al 20 de julio de 2024, congreso que lamentablemente no ha podido contar con profesores que realizamos nuestra labor en Japón. Seguramente el 35º Congreso Internacional de ASELE, que se celebrará del 28 al 31 de julio de 2025 bajo el título *Aprendizaje informal, inmersión lingüística, divulgación y transferencia*, en la Universitat Jaume I (Castellón, España) podrá contar de nuevo con una gran presencia de docentes provenientes de Japón. Y quién sabe, quizás algún día, como parte del compromiso de internacionalización de ASELE, la sede de su congreso esté en alguna universidad japonesa.

(フアン・カルロス・モヤノ＝ロペス 清泉女子大学准教授)

## 【学会等報告 2】

XIX Congreso AHLM (Alcobaça 修道院、2023 年 9 月 5 日—9 日)

小川 佳章

Asociación Hispánica de Literatura Medieval(AHLM)は、1987 年に最初の総会・研究発表会を行って以来（初代会長は今年逝去された Francisco Rico 氏）、西暦奇数年に Congreso を開催し（ただし 2021 年に Ciudad de México での開催が予定されていた大会はコロナ禍のため中止）、2008 年以降は偶数年に Coloquio を催してきた。世界的な人文科学の危機の時代にあって、同学会が中世文学の研究者養成に果たしてきた役割は計り知れない。現在ホームページ上で確認できる会員数は 450 名ほどである。

2023 年もポルトガルの Universidade Aberta が主管校となって、Pedro I 世と愛妃 doña Inés が眠る Alcobaça 修道院で、19 回目となる Congreso が開催された。最終日を除く 4 日間で 8 つの招待講演と 100 件近い発表が行われた。講演者とタイトルは以下の通り：

- ① Aries A. Nascimento, “Alcobaça em interrogação...”
- ② Elvira Fidalgo, “Las aves del *Alba* de Torneol: otra propuesta de interpretación”
- ③ Isabel Beceiro Pita, “Libros portugueses en Castilla (1430-1451): contextos devocionales y nobiliarios”
- ④ Tobias Brandenberger, “Recorridos transibéricos de la ficción sentimental”
- ⑤ Yara Frateschi Vieira, “*Dona, senhor, molher ...*: lírica galego-portuguesa e ‘minorias’ femininas”
- ⑥ Mariano de la Campa, “Historiografía, prosa medieval e historia literaria en Castilla (1270-1350)”
- ⑦ Rafael Beltrán, “Visiones y distorsiones de imágenes evangélicas de concepción y muerte en los primeros libros de caballerías”
- ⑧ María Jesús Lacarra, “Motivos y temas literarios en el arte hispánico”

一方、個別発表の方は、狭義のテキスト校訂、本文批判に関するものが多数を占めるのは当然としても、書誌学、騎士道文学、古典受容、占星術、ダンテ、トゥルバドール、説話学など、そのテーマは多岐に渡り、データベースの構築など、いわゆる Humanismo Digital を意識したような発表も面白かった。

なお、大会中日となる 7 日夕刻には総会が開かれ、女性として初めて会長を務めた María Jesús Lacarra 先生（Zaragoza 大学）は任期満了で退任、Valencia 大学の Marta Haro 先生が後任に選ばれた。これに伴い理事も半数改選となり、「多様性」への配慮なのか、私も理事に選出された。アジア圏からの選出は初めての事らしい。

（おがわ・よしのり 立教大学外国語教育研究センター）

### 【学会等報告3】

#### メキシコ先住民の文化実践をめぐる講演会報告

安保 寛尚

2024年7月10日から7月21日にわたって、メキシコのオアハカ・ベニート・フアレス自治大学准教授アルバ・ミランダ氏を招聘し、立命館大学、国立民族学博物館、神戸大学において講演会を開催した。本報告では、筆者が企画・運営／コーディネートした前者二つの講演会について報告する。

ミランダ氏は、オアハカ州における先住民の文化実践の研究者である。オアハカ州には、サポテカ、ミシュテカ、ミヘなど、異なる独自の言語や文化を持つ多くの先住民が暮らしている。歴史的に上位に置かれてきたスペインの言語と文化に対し、今日先住民の一部のアーティストは、文学やヒップホップ、写真、絵本など、多様なメディアを戦略的に利用してそれぞれの言語や文化を表現しており、ミランダ氏はそのような実践を分析した業績を残している。

筆者は現在、立命館大学国際言語文化研究所に所属するヴァナキュラー文化研究会の代表を務めていて、ここでは簡単に言うと、時代や地域を限定することなく、権威づけられていない、ある集団の日常の文化について研究している。そのような研究会の関心から、筆者がミランダ氏の業績に目を止め、講演会を企画したというのが招聘の経緯である。そして7月12日に、「グローバル時代の生きる伝統-メキシコ先住民アーティストの実践- (Living Traditions in the Global Era: Practices of Indigenous Mexican Artists)」と題する講演会を立命館大学で開催した。講演会には、チアパス自治大学で修士課程を修了し、ツォツィル語の先住民文学を研究する鋤柄史子氏も招いた。二人の講演を通して注目されたことの一つは、文字を持たないいくつかのメキシコの先住民言語において、アルファベットを用いた文字化とその体系化が、それぞれの文化実践の中で試みられていることだ。

筆者は今年2月、ミランダ氏との打ち合わせでオアハカ・ベニート・フアレス自治大学を訪問し、氏が担当する授業に参加した。その一つのクラスの中にも、サポテカ語やミヘ語を母語とする学生が複数いて、彼らはそれぞれの民族で大学へ進学した最初の世代になるそうだ。ミヘ語を話す学生は、将来教師となってミヘ語の教育に関わることを目標としていると語った。今後メキシコにおいて、少数民族・少数言語の存在感が増すことを予感させる経験だった。またその口承文芸についても、2021年、2022年に Eliza Ramírez Castañeda 編、『メキシコ先住民の神話と物語』 (*Mitos y cuentos indígenas de México*) が Fondo de Cultura Económica から二巻本で刊行されており、関心が高まっていることは間違いない。口承文芸には、近年“Literature”と対比させた“Orality”という用語も使われるが、その「純粋な」伝統だけを見ようとするのではなく、文字化された作品について、文学からの影響や、上位言語・文化との相互作用を分析する研究も必要になってくるのではないかと思う。

続いて7月14日には、国立民族学博物館を拠点とする「辺境ヒップホップ研究会」(HP: <https://minpaku-ees.jp/studies>) において、鋤柄氏による「現代メキシコの先住民作家による文化実践」とミランダ氏による「サポテカのヒップホップ-先住民の日常生活の語りにおける伝統と革新-」を組み合わせた講演会をコーディネートした。筆者はこの研究会に研究協力者として参加していて、今年6月に青土社から刊行された『辺境のラッパーたち：

立ち上がる「声の民族誌』』にキューバのヒップホップについての論考を寄稿している。ヒップホップは、もともと NY の黒人の若者たちが中心になって生み出した権威に対する抵抗文化だが、その要素の一つのラップは、都市文化の新しい装いで世界中の言語の韻踏み文化と接合している。そのようなヒップホップの歴史や特徴は、キューバの黒人詩を研究してきた筆者にとって、またヴァナキュラー研究会にとっても興味深いテーマだ。

ミランダ氏がこの講演で紹介したのが、オアハカ州の町 **Juchitán de Zaragoza** 出身の若者たちが結成したヒップホップ・グループ **Juchirap** である。彼らはサポテカ語とスペイン語を組み合わせたラップで、近代化とグローバル化の影響を受けて変容する先住民共同体の日常や、暴力、差別などの社会問題を語る。講演では、“**Mi gente**” (<https://www.youtube.com/watch?v=tPbwT-bIATg>)と“**Chonna Badu**” (<https://www.youtube.com/watch?v=cL3RDSgxTmU>) を例に、そのリリックや MV のコンテキスト、メッセージの分析が行われた。特にグループの最新曲の二曲目は、ポップなノリで MV もとても魅力的だ。これを聞くとサポテカ語は「保護すべき少数言語」というより、ラップで真似したくなるカッコイイ言語に聞こえる。ヒップホップに関心がなくてもぜひ見ていただきたい。もしかすると、このような文化実践が少数言語のイメージを変える契機になるのではないかと思う。

実は遡って今年 3 月には、ペルーから研究者を招聘して、ケチュア語ラップについての講演会を立命館大学と国立民族学博物館で開催した。先住民言語のラップは、スペイン語圏における周縁の声を届ける手段となっており、その展開をさらに視野を広げて追っていきたいと考えている。なお、今年 12 月 13 日（金）には、立命館大学において、プエルトリコのラッパーと研究者を招聘して講演会を開催する。日本のラッパーも招待して合同パフォーマンスも予定している。

筆者はキューバ文学を専門としているのだが、うわついた関心やいろいろな偶然に流されて、最近イベント・プロモーターと化している。自分がどこに着岸するのか、そもそも着岸できるのかもわからない。まあそれならそれで、あえて逆らわず流れに身を任せ、いつか海に出るだけのことだ。

（あんぼ・ひろなお 立命館大学法学部教授）

#### 【学会等報告 4】

Día del Libro : 世界図書・著作権の日イベント「黄金世紀文学の光と影」

吉田 彩子

セルバンテスの命日でありサン・ジョルディの日でもある(史実とは異なるがシェイクスピアの命日とも言われる) 4月23日がユネスコによって世界図書・著作権の日と定められたのはスペインの働きかけによるものだった。そんな経緯もあって、例年、インスティトゥト・セルバンテス東京では、この日を記念してさまざまなイベントが行われてきた。今年は「黄金世紀文学の光と影 立石博高教授とアルフォンソ・マテオ=サガスタ Alfonso Mateo-Sagasta 教授の対話」が開催され、筆者は司会として参加することになった。スペイン黄金世紀を一般に紹介する貴重な機会であったと思われるので、簡略に報告しておきたい。

マテオ=サガスタ氏は1961年生まれ、マドリード自治大学で地理・歴史学を専攻し、考古学と人類学に特化した書店創設や雑誌の編集を経て、2002年から著作に専念したという経歴の持ち主である。歴史学の知識を活かした小説やエッセイで知られ、『贗作ドン・キホーテ』の作者アベリャネダの正体を探る『インクの泥棒たち *Ladrones de Tinta*』(インドロ・モンテマヨールを主人公にした黄金世紀三部作の第1作)は複数の歴史文学賞を受賞した。東京外国語大学の前学長である立石博高氏は我が国を代表するスペイン史の研究者であり、2021年に『スペイン史10講』(岩波新書)を上梓されたことも記憶に新しい。黄金世紀という時代の文脈で文学を語るにふさわしい組合せといえよう。

午後には展示会など別の催しも行われ、関係者にはサン・ジョルディの日の伝統に倣って赤いバラと麦の穂が配られた。当該イベントの参加者達がオーディトリウムに集まり始めたのは、夕刻になって降り出した雨の中であった。

2022年9月に着任したビクトル・アンドレスコ Víctor Andresco 館長のもとで開催される2度目のDía del Libroである。開会挨拶の中で、この日が通訳・翻訳の業務を通じて文化紹介に携わる人々に感謝する日でもあることに言及されたのは、トルストイの『復活』などロシア文学の翻訳者として知られるアンドレスコ氏ならではの配慮であろう。補足すると、携帯電話のZOOMを使って同時通訳を担当したのはダニエル・オロスコ Daniel Orozco 氏である。

歴史家と歴史小説家の対談であることから、話題は歴史と文学の叙述の相違に始まり、スペイン黄金世紀の魅力(光)と問題点(影)へと収斂されてゆく。マテオ=サガスタ氏は歴史についての物語風エッセイ『採用試験 *Oposición*』の中で、歴史は現代の関心を起点として語られるフィクションであるという説を開陳しており、文学と歴史はさほど変わらないという考えである。対する立石氏からは、歴史は事実に立脚するものであり勝手に操作できない、また反駁可能性を有するものであるから、歴史と文学は区別される必要があるのでは、との指摘があった。黄金世紀について、立石氏からは、スペインにおいてはカトリックの宗教性が社会の隅々まで支配しており、文学も宗教的な宣伝の道具であることを免れなかったとして、具体的には「無原罪の御宿り」の教義への注意喚起が行われた。マテオ=サガスタ氏からは、この意見に概ね賛同が示され、セルバンテスについてさらに詳細な考察が述べられた。微妙に異なりながら多くの点で一致している両氏のご意見は、司会者として「特等席」で拝聴していて実に興味深いものであったが、限られた紙面では

とても全容をお伝えできない。現在 YouTube 動画が配信されているので、関心のある方は是非ご覧いただきたい。

日本語版：<https://youtu.be/5pse8RQj3F8?si=libXPdAYIvWj5063>

スペイン語版：<https://www.youtube.com/watch?v=0WS12HTibYQ>

またはインスティトゥトの HP から YouTube のアイコンをクリック（タップ）してください。

思えば 20 世紀を通じて文学や文学研究が、歴史から目を背け、遠ざかり続けたことは否めない事実である。そうした偏向に対する反省が、1980 年代に始まった新歴史主義 *new historicism* であり、この流れが 21 世紀に入ってからスペインでも浸透しつつあることを考えると、今回の対談のテーマは時宜を得た意義深いものであったといえよう。

(よしだ・さいこ 清泉女子大学名誉教授)

## 【学会等報告5】

京都セルバンテス懇話会第 24 回全国・名古屋大会

三浦 知佐子

2023 年 9 月 16 日(土)にスペイン大使館・朝日出版社後援、京都セルバンテス懇話会主催（代表・片倉充造天理大学名誉教授）、第 24 回全国・名古屋大会が、南山大学の共催（実行委員・小阪知弘准教授）で挙行された。今回の全国大会では 6 件の研究報告および特別講座と記念講演が行われた。以下にプログラムを紹介する。

研究発表 1：菅田百合絵（南山大学・名城大学他兼任講師）

「『ドン・キホーテ』邦訳における表現の比較」

研究発表 2：吉野達也（中京大学講師）

「政党システムから見るメキシコの民主化（1989-2000）」

研究発表 3：前田明美（中京大学特任准教授）

「バローハ作『完成の道』と風景描写」

特別講座：平野敬二（シニアソムリエ）

「ヴィノ・デ・ヘレス — シェリーの産地を訪ねて」

研究発表 4：岡本信照（京都外国語大学教授）

「中近世スペイン語における季節名称を巡って—黄金世紀は「五季」だったのか？」

研究発表 5：水戸博之（文化史家）

「文法と神学—出エジプト記 20, 3-4 における、いわゆる間接再帰をめぐって」

研究発表 6：浅香武和（ガリシア学士院）/ロマネスクハープ演奏 小坂理江（トルブール）

「カンティーガス・デ・サンタ・マリア 103(T)の奇蹟について」

記念講演：佐竹謙一（南山大学名誉教授）

「スペイン語を日本語に訳すときのさまざまな壁」

第24回全国大会は、南山大学外国語学部長の牛田千鶴スペイン・ラテンアメリカ学科教授による挨拶で始まり、南山大学名誉教授である佐竹謙一先生の記念講演へと進捗した。本大会については、京都セルバンテス懇話会編『スペイン学』第26号（論創社、2024年3月）にも「講演録」、「特別講座録」をはじめ関連の記事が掲載されている。

2024年9月6日(金)には、第25回全国・京都大会が龍谷大学で開催される。

(みうら・ちさこ 京都セルバンテス懇話会庶務 天理大学他兼任講師)

## 【学会等報告6】

関西スペイン語学研究会（CLHK）2023年度活動報告

岡 あゆみ

関西スペイン語学研究会（Círculo de Lingüística Hispánica de Kansai、略称 CLHK）の2023年度の活動を報告いたします。

第453回例会 2023年4月29日 オンライン

Pablo Navarro Mayor（神戸市外国語大学大学院）"La enseñanza de la conversación en español en las universidades japonesas: situación, desafíos y propuesta didáctica"

第454回例会 2023年5月20日 関西学院大学大阪梅田キャンパス

金荷銀（神戸市外国語大学大学院）「スペイン語の願望表現を用いた依頼発話について」

村井勇輝（大阪大学大学院）「準繫辞動詞としての ir と venir の差異について」

第455回例会 2023年6月11日 大阪市立北区民センター

長由佳（愛知県立大学非常勤講師）「cada vez que 節におけるアスペクト—時制、叙法—」

土井裕文（関西外国語大学）「アラビア語起源語に冠する al-の有無」

第456回例会 2023年7月23日 関西学院大学大阪梅田キャンパス

蔵満啓太（大阪大学大学院）「カタルーニャ語バレアレス方言の母音弱化現象について—castellanismes のスペクトログラム上の特徴の記述—」

第457回例会 2023年10月29日 関西学院大学大阪梅田キャンパス

清水悠佑（神戸市外国語大学大学院）「ペルースペイン語の現在分詞にみられる諸特徴について」

第458回例会 2023年11月18日 オンライン

高橋瑛奈美（大阪大学大学院）「三人称の直接目的格の選択と他動詞性の高低—le 語法を誘発する要因の通時的考察」

第459回例会 2023年12月23日 関西学院大学大阪梅田キャンパス

柿原武史（関西学院大学）「非ガリシア語話者向けガリシア語教育とガリシア語学習者の学習動機」

第460回例会 2024年2月10日 オンライン

福嶋教隆（神戸市外国語大学名誉教授）「不定詞の意味上の主語に関する予備的考察」  
第 461 回例会 2024 年 3 月 31 日 関西学院大学大阪梅田キャンパス  
柳田玲奈（関西外国語大学）「初級スペイン語授業における発音教授に関する考察」  
長縄祐弥（拓殖大学）「動詞 *echar* の意味分析」

研究成果の発表後は毎回、出席メンバーから質疑があり、活発で有益な議論が展開するのが常となっています。なお、関西スペイン語学研究会の機関誌 *Lingüística Hispánica* の第 46 号（2023 年度）は第 47 号（2024 年度）との合併号として発行予定です。

関西スペイン語学研究会と東京スペイン語学研究会が毎年合同で開催しているスペイン語学セミナー SELE は、2023 年 8 月 23 日から 25 日にかけて静岡県掛川市のつま恋リゾート彩の郷で開催され、合計 18 本の研究発表がありました。

また、会報第 30 号でも報告されている通り、2023 年 2 月に関西スペイン語学研究会も協力し、立命館大学にて「日本語とスペイン語の対照文法公開シンポジウム」が開催されました。そこでの講演及び研究発表は『立命館言語文化研究』35 巻 3 号（2024 年 3 月発行）に論文として掲載されています。

福嶋教隆 "Análisis contrastivo de la modalidad en español y japonés: una prueba de la teoría de los espacios mentales" (pp.79-99)

川口正通 "Construcciones condicionales como estrategia de cortesía: un estudio contrastivo entre el español y el japonés" (pp.101-118)

有田節子 "Oraciones imperativas acompañadas de una oración condicional en japonés y español" (pp.119-135)

手塚進 「GOBERNAR 動詞のアスペクト的多義性」 (pp.137-150)

2024 年度もこれまでと同様に例会を開催しており、また、本報告を執筆中の 8 月はスペイン語学セミナー SELE2024 があり、多くのメンバーが一堂に会して研究成果の発表を聞けるのを心待ちにしている時期であります。今年度の詳細については次号に譲りたいと思います。

（おか・あゆみ 大阪大学等非常勤講師）

## 【学会等報告7】

関西スペイン語教授法ワークショップ (TADESKA) 2023 年度活動報告

小川 雅美・柳田 玲奈

「関西スペイン語教授法ワークショップ (Taller de Didáctica de Español de Kansai、略称 TADESKA)」は、スペイン語教師同士が対等な立場でスペイン語教育についての情報を共有したり、それぞれの考えを話し合ったりすることを目的として 2006 年に立ち上げられた勉強会です。2023 年度も 8 回の月例会と 1 回の特別イベントを開催し、「新時代のスペイン語教授法」という年間テーマを中心にワークショップ (以下 WS) や口頭発表が行われました。その概要を報告いたします。

第 161 回 2023 年 5 月 13 日 (オンライン開催)

発表 1 : Pablo Navarro “La IA y la enseñanza de lenguas extranjeras: el caso de ChatGPT”

発表 2 : 平井素子「オンライン国際交流実践報告」

第 162 回 6 月 11 日 (関西学院大学大阪梅田キャンパス[以下「関学梅田」])

WS 1 : 江澤照美「インタラクティブな外国語教育—日本でスペイン語を使って交流する—」

WS 2 : Fernando Ramos “¿Vemos otro capítulo? : el uso de series en las clases de español”

第 163 回 7 月 8 日 (オンライン開催)

発表 : 和田瞳「新時代における高校の外国語教育」

第 164 回 8 月 9 日 (オンライン開催)

発表 1 : Analía Vitale “Sexismo lingüístico y lenguaje inclusivo en español”

発表 2 : Jaime Recuero “Del lenguaje sexista al lenguaje inclusivo”

第 165 回 10 月 8 日 (オンライン開催)

発表 : 岡村ビクトル勇「新たなスペイン語授業の模索—語学不要論と教員不要論に反論するための三つの教授法—」

第 166 回 11 月 12 日 (オンライン開催)

発表 1 : Roberto Negrón “El desarrollo de las competencias lingüísticas a través del dictado”

発表 2 : Paula Letelier “El desarrollo de las competencias interculturales a través de microrrelatos”

第 167 回 12 月 10 日 (関学梅田)

WS 1 : 長由佳「21 世紀コーパスの使い方」

WS 2 : 長縄祐弥「機械翻訳とスペイン語教育(5)—授業への機械翻訳の積極的な導入—」

第 168 回 2024 年 2 月 23 日 (関学梅田)

『第 15 回関西スペイン語教師の集い』 (オンライン参加 5 名、対面参加 22 名)

「21 世紀を生きる学生たちのために私たちには何ができるか・何をすべきか—事例から見えてくる「力」とその育成—」

1) 導入スピーチ : 塚原信行 「学生たちが生きていく 21 世紀の今後は？」

2) 基調報告 : 村上陽子「コロンビア研修—21 世紀を生きる『力』の視点から—」

3) パネルディスカッション :

・江澤照美「『仲介』活動の観点からの分析」

- ・宮本愛梨「世界を知るための対話—ある人類学者の視点から—」
- ・廣瀬（和田）瞳「外国語の授業における思考力・発信力」

#### 4) 全体ディスカッション

第 169 回 3 月 22 日（オンライン開催）

発表：Ángel Gil “La enseñanza de vocabulario en la clase de español”

AI の急速な発展と普及、教学のデジタル化、社会や価値観の変化等、私たちはすでに「新時代」を生活していると言えます。その中で今後の世界を生きる学生たちに教員として何をなすべきかを共に考える 1 年となりました。

2024 年度は『ヨーロッパ共通参照枠 (CEFR)』増補版の「仲介 (mediación)」という概念に着目し、「仲介と協同」という年間テーマで活動中です。活動報告は順次 TADESKA ホームページ (<https://tadeska.sakura.ne.jp/>) に掲載しております。TADESKA は、様々な観点から自由に議論する場であり続けることを目指しております。ご専門に関わらず、スペイン語教育に従事されている方々のご参加を歓迎いたします。

(おがわ・まさみ 京都大学等非常勤講師、やなぎだ・れいな 関西外国語大学准教授)

### 【学会等報告8】

東京スペイン語学研究会(CELHT)2023 年度活動報告

喜多田 敏嵩

東京を中心に活動するスペイン語学研究者で構成される「東京スペイン語学研究会 (Círculo de Estudios Lingüísticos Hispánicos de Tokio: CELHT)」の 2023 年度の活動について報告する。昨年度は 11 回の定例研究会が催され、以下に記す 13 点の研究発表が行われた。発表者の氏名・所属は発表時点のものである。

第 528 回例会 (2023/04/22 於 東京外国語大学)

題目 Resultados de la encuesta sobre el loísmo y el leísmo en Cochabamba, Bolivia  
(コチャバンバにおける loísmo, leísmo のアンケート結果について)

発表者 高垣敏博 (東京外国語大学名誉教授)、梅崎かほり (神奈川大学准教授)

第 529 回例会 (2023/05/27 於 東京外国語大学)

題目 ¿Cuándo el *pimiento* dejó de ser un árbol de pimienta?  
(Pimiento はいつ「実 (ミ)」になったか?)

発表者 高松英樹 (中央大学教授)

第 530 回例会 (2023/06/24 於 東京外国語大学)

題目 El orden de palabras de los verbos de consumición  
(消費動詞を含む文の語順についての一考察)

発表者 結城健太郎 (東海大学教授)

第 531 回例会 (2023/07/29 於 東京外国語大学)

題目 ¿Cómo aparece la función pragmática de las expresiones de los actos de habla directivos en las traducciones de los subtítulos en la película *También la lluvia* (2010)? (行為指示表現における語用論的機能は字幕翻訳にどう表出されるか —スペイン語映画「ザ・ウォーター・ウォー」を題材に一)

発表者 渡部美貴 (神田外語大学非常勤講師)

題目 Las preposiciones de español *para* y *por* y sus traducciones en japonés (スペイン語前置詞 *para*, *por* とその日本語訳について)

発表者 齊藤友理 (慶應義塾湘南藤沢高等部非常勤講師)

第 532 回例会 (2023/10/07 於 明治学院大学)

題目 Nuevas perspectivas sobre los verbos copulativos (スペイン語繫辞動詞：新しい視点)

発表者 大森洋子 (明治学院大学教授)

第 533 回例会 (2023/10/28 於 東京外国語大学)

題目 Problemas y métodos de la estilometría española (スペイン語計量文体論の問題と方法)

発表者 上田博人 (東京大学名誉教授)

第 534 回例会 (2023/11/25 於 立教大学)

題目 Buscando excusas (Excusa を探して)

発表者 松本旬子 (立教大学准教授)

第 535 回例会 (2023/12/23 於 東京外国語大学)

題目 El lugar de Benito Ruiz, *Declaración* (1587) en la polémica ortográfica en el Siglo de Oro y su análisis (Benito Ruiz, *Declaración* (1587) の黄金世紀のスペイン語正書法論争における位置づけと分析)

発表者 高田丈太郎 (上智大学大学院博士前期課程)

題目 Estudio comparativo de las diferencias entre las conjunciones causales, *porque* y *como* en español (スペイン語の原因・理由を表す接続詞 *porque* と *como* の差異に関する考察)

発表者 堀江舞柚 (東京外国語大学大学院博士前期課程)

第 536 回例会 (2024/02/03 於 東京外国語大学)

題目 Consideración sobre la definición de interrogación ecoica (エコー疑問文の定義に関する考察)

発表者 工藤綾 (東海大学非常勤講師)

第 537 回例会 (2024/02/24 於 東京外国語大学)

題目 Sobre el tiempo de los verbos modales en las frases contrafactuales (法動詞を伴う文の時制について—過去の反実仮想を中心に—)

発表者 栗林ゆき絵 (中央大学兼任講師)

第 538 回例会 (2024/03/30 於 東京外国語大学)

題目 Análisis de encuestas basado en la externalización masiva para las palabras polisémicas: en caso de *amai* y *dulce* (多義語の派生関係に対するクラウドソーシングを用いた調査分析：「甘い」と *dulce* を事例に)

発表者 西内沙恵 (北海道教育大学講師)

8月は定例研究会に代わり、関西スペイン語学研究会 (Círculo de Lingüística Hispánica de Kansai: CLHK) と合同でスペイン語学セミナー (Seminario de Lingüística Española de Japón : SELE) が例年通り開催された。研究会の歩みについては松井健吾会員が会報 29号に寄せた「東京スペイン語学研究会—最近 10 年間の活動を振り返って」に譲るが、今年度は定例研究会のハイフレックス開催の継続、ならびに学会誌『スペイン語学研究』の電子化準備が正式決定し、新たな体制で来年度の設立 50 周年を迎えようとしている。

(きただ・としたか 東京外国語大学講師)

## 【学会等報告9】

### GIDE (スペイン語教育研究会) 活動報告

小倉 麻由子

GIDE (スペイン語教育研究会) は、東京近辺の大学などで活動するスペイン語教員が、授業を活性化し、質の高いスペイン語教育を達成するための自己啓発の場である。現在は、ほぼ毎月第2金曜日にオンラインで会合を持っている。

2003年4月の発足当初は、文法項目の教え方を中心に活動をおこなっていたが、その後、コミュニケーション重視の指導でどのように文法学習を入れていくべきか(大森他、2019)、といった点を深めることを目的として『ヨーロッパ言語共通参照枠』(以後 CEFR) についての勉強会などを開催してきた。この CEFR の意義を日本のスペイン語教育のなかで生かすことができないかということを考え、『外国語学習のめやす 2012—高等学校の中国語と韓国語教育からの提言—』なども参考にしながら外国語としてのスペイン語教育の大まかな指針を策定するべく議論を重ね、2015年に『言語運用を重視した参照基準--スペイン語学習のめやす--』を上梓し、さらにこのめやすに基づいた教室活動の例を策定すべく、グループごとに提案を行い、試行錯誤の上、2019年には『スペイン語学習のめやす：教育活動への応用』を上梓し、先述の『めやす』と共に GIDE のホームページでも紹介している。

その後、教室活動、プロジェクト学習をどのように評価するかについてのひとつの解決策として 2012年の中央審議会答申の中でも取り上げられたルーブリック評価についても、スペイン語教育においても活用できると考え、ルーブリック評価法について研究し、さらに『スペイン語学習のめやす--教育活動への応用』内で策定した授業モデルで使用できるルーブリックを、各授業の目的や目標に合わせて作成し、2023年にオンライン版のみで上梓し、GIDE のホームページで紹介している。

2018年に CEFR の補遺版が WEB 上で公開され、それまでは語学学習の目標のひとつとしてとらえられていた「mediación (仲介)」が、単なる翻訳や通訳活動ではなく、他者との協働、人と人、人と情報、人と知識を繋ぐためのスキルを身につけるための活動であることが注目されるようになった。GIDE も「mediación」を我々の教育活動に活かすことでさらに外国語教育の充実が図れると考えて、2023年度からこれをテーマに活動を行っている。

まず、CEFR が「mediación（仲介）」という言葉をごどのように使用しているかを理解する目的で、各自が CEFR 補遺版に目を通した上で、CEFR の策定意図を再認識し、「mediación」という言葉の定義を理解することに努めた。次に「mediación」のスキルやコンピテンシーをどのように説明し、枠組み作りをしているのかを理解するため、「mediación」の分類表に従って「mediación 活動」と「mediación ストラテジー」に分類される項目ごとにグループ分けをし、その項目について研究を行い、各項目の定義や枠組みを理解することで、どのようなスキルやコンピテンシーをどの段階でどのように身につけるべきかを理解し、毎月の研究会の中でグループごとに報告を行い、情報共有を図ってきた。2024 年 7 月 31 日現在、ちょうどすべてのグループの発表が終わったところである。

現在の少子化の影響を受け、今後日本国内の多文化共生は加速することは必至であり、教育現場においても多文化共生がますます進むことになる。その中で、語学の授業においてこのようなスキルやコンピテンシーを身につけることは必要不可欠となるであろう。

今後も、GIDE は知識や技能の習得だけに偏らない、より自律的な学習者を育てるための研究を行う場として、また、スペイン語教育に携わる教員たちが、ネイティブ・非ネイティブの枠を超えて協力する場として活動を続けていく予定である。

（おぐら・まゆこ 昭和女子大学准教授）

## 【新刊案内】

2023年6月から2024年5月までのスペイン・ラテンアメリカ関係の新刊書です。遺漏があるかもしれません。ご教示願います。

- 『現代バスクを知るための60章 第2版』，萩尾生（編著），吉田浩美（編著），明石書店（エリア・スタディーズ），2023年6月
- 『暗い庭：聖人と亡霊、魔物と盗賊の物語』，ラモン・デル・バリェ＝イン克蘭，花方寿行（訳），国書刊行会，2023年6月
- 『マヤと古代メキシコ文明のすべて カラー版』，青山和夫（監修），宝島社（宝島新書），2023年6月
- 『メキシコ古代都市の謎：テオティワカンを掘る』，杉山三郎，朝日新聞社，2023年6月
- 『アジア放浪記』，フェルナン・メンデス・ピント，江上波夫（訳），河出書房新社（世界探検全集），2023年6月
- 『ポピュリズム大陸南米』，外山尚之，日経BP日本経済新聞出版，2023年6月
- 『わたしは、不法移民：ヒスパニックのアメリカ』，カーラ・コルネホ・ヴィラヴィセンシオ，池田年穂（訳），慶應義塾大学出版会，2023年6月
- 『メキシコ法務：外資規制、許認可、労務、税務から紛争対応までの完全ガイドブック』，TNYグループ（編），民事法研究会，2023年6月
- 『スペイン語レッスン中級』，阿由葉恵利子，スリーエーネットワーク，2023年7月
- 『霊操』，イグナチオ・デ・ロヨラ，川中仁（訳），教文館，2023年7月
- 『見ること』，ジョゼ・サラマーゴ，雨沢泰，河出書房新社，2023年7月
- 『メソアメリカ文明ガイドブック』，市川彰，新泉社，2023年7月
- 『海賊たちは黄金を目指す：日誌から見る海賊たちのリアルな生活、航海、そして戦闘』，キース・トムスン，杉田七重（訳），東京創元社，2023年7月
- 『フレーヴォ、カポエイラ、パッツ：ブラジル、ペルナンブーコの民衆芸能研究』，ヴァウデマール・ヂ・オリヴェイラ，神戸周（訳），溪水社，2023年7月
- 『フェルナンド・ペソア伝：異名者たちの迷路』，澤田直，集英社，2023年8月
- 『移民船から世界を見る：航路体験をめぐる日本近代史』，根川幸男，法政大学出版局，2023年8月
- 『乾杯、神さま』，エレナ・ポニアトウスカ，鋤柄史子（訳），幻戯書房（ルリユール叢書），2023年8月
- 『アマゾン五〇〇年：植民と開発をめぐる相克』，丸山浩明，岩波書店（岩波新書），2023年8月
- 『女囚たち：ブラジルの女性刑務所の真実』，ドウラジオ・ヴァレーラ，伊藤秋仁（訳），水声社，2023年8月
- 『ワタシたちはガイジンじゃない！：日系ブラジル人「笑い」と「涙」30年の物語』，NHK「ワタシたちはガイジンじゃない！」取材班（編著），春陽堂書店，2023年8月
- 『極める！スペイン語の語彙・表現ドリル』，菅原昭江，白水社，2023年9月
- 『スペイン語で読む星の王子さま 新版』，サン＝テグジュペリ，セシリア・フェルナンデス＝フノ（訳），IBCパブリッシング，2023年9月

- 『カンティーガス・デ・サンタ・マリアへの誘い：聖母マリア頌歌集』，浅香武和（編著），詩創社，2023年9月
- 『シラー戯曲傑作選 ドン・カルロス：スペインの王子』，フリードリヒ・シラー，青木敦子（訳），幻戯書房（ルリユール叢書），2023年9月
- 『まるごと一冊スペイン音楽の本』，下山静香，アルテスパブリッシング，2023年9月
- 『スペイン危機の二十世紀：内戦・独裁・民主化の時代を生きる』，八嶋由香里編著，慶應義塾大学出版会，2023年9月
- 『フリアとシナリオライター』，マリオ・バルガス＝リョサ，野谷文昭（訳），河出書房新社（河出文庫），2023年9月
- 『閉ざされた扉 ホセ・ドノソ全短編』，ホセ・ドノソ，寺尾隆吉（訳），水声社（フィクションのエル・ドラード），2023年9月
- 『アリス連続殺人』，ギジェルモ・マルティネス，和泉圭亮（訳），扶桑社（扶桑社ミステリー），2023年9月
- 『ホセ・グアダル＝ペ・ポサダの時代：十九世紀メキシコ大衆印刷物と版元バネガス・アロヨ工房』，長谷川ニナ，八木啓代（編訳），上智大学出版，2023年9月
- 『オアハカの動物たち：VINTAGE OAXACAN WOOD CARVING』，岩本慎史，大福書林（民衆藝術叢書），2023年9月
- 『リスボン大地震：世界を変えた巨大地震』，ニコラス・シュラディ，山田和子（訳），白水社，2023年9月
- 『アマゾンのふしぎな森へようこそ！：先住民の声に耳をすませば』，南研子，合同出版，2023年9月
- 『天草版ラテン文典：巻一全訳』，カルロス・アスンサン（編集），黒川茉莉（編集），豊島正之（編集），八木書店，2023年9月
- 『まいにちふれるスペイン語手帳2024』，スペイン語教室 ADELANTE（監修），白水社編集部（編），白水社，2023年10月
- 『21世紀のスペイン演劇2』，田尻陽一（訳），岡本淳子（訳），水声社，2023年10月
- 『ゲルニカとパブロ・ピカソ：平和への祈り』，久保田有寿（監修），岩崎書店（調べる学習百科），2023年10月
- 『パピルスのなかの永遠：書物の歴史の物語』，イレネ・バジェホ，見田悠子（訳），作品社，2023年10月
- 『吹きさらう風』，セルバ・アルマダ，宇野和美（訳），松籟社（創造するラテンアメリカ），2023年10月
- 『ナルコ回廊をゆく：メキシコ麻薬戦争を生きる人々』，山本昭代，風詠社，2023年10月
- 『パクス・クルトゥラ：平和構築の要諦としての文化』，ホルヘ・サンチェス＝コルデロ，松浦芳枝（訳），西田書店，2023年10月
- 『メキシコ：経済・貿易・産業報告書 2023/2024年版』，ARC 国別情勢研究会，2023年10月
- 『ボリビア開拓記外伝：コロンア沖縄疫病・災害・差別を生き抜いた人々：スペイン語版』，渡邊英樹，吉富志津代（訳），大城ロクサナ（訳），ボリビア沖縄県人会翻訳監修，2023年10月

- 『世界史の中の戦国大名』，鹿毛敏夫，講談社（講談社現代新書），2023年10月
- 『ブラジル日系人の日本社会への貢献』，梅田邦夫，東京図書出版，2023年10月
- 『ゼロから始める書き込み式スペイン語 BOOK』，平井孝史，成美堂出版，2023年11月
- 『スペイン内戦と人間群像：戦場に赴いた知識人の光と影』，川成洋，人間社，2023年11月
- 『真っ白いスカンクたちの館』，レイナルド・アレナス，安藤哲行（訳），インスクリプト，2023年11月
- 『生贖の門』，マネル・ロウレイロ，宮崎真紀（訳），新潮社（新潮文庫），2023年11月
- 『メキシコ：時代の痕跡と歴史認識』，大垣貴志郎，行路社，2023年11月
- 『コスタリカ：「純粋な人生」と言いあう平和・環境・人権の先進国』，伊藤千尋，高文研，2023年11月
- 『新日本プロレス 英語&スペイン語「超」入門』，濱崎潤之輔（監修），元井美貴（監修），アルク，2023年12月
- 『ガウディさんとドラゴンの街』，パウ・エストラダ，宇野和美（訳），教育評論社，2023年12月
- 『アンテロー・デ・ケンタルの全ソネット集：および、その生涯と思想に関する考察』，諏訪勝郎，えにし書房，2023年12月
- 『シェイクスピアの記憶』，ホルヘ・ルイス・ボルヘス，内田兆史（訳），鼓直（訳），岩波書店（岩波文庫），2023年12月
- 『ハリケーンの季節』，フェルナンダ・メルチョール，宇野和美（訳），早川書房，2023年12月
- 『メキシコ日記』，中村哲，桜井書店，2023年12月
- 『私が諸島である：カリブ海思想入門』，中村達，書肆侃侃房，2023年12月
- 『文法から学べるスペイン語 音声 DL 版』，井戸光子，石村あつ，ナツメ社，2024年1月
- 『1か月で復習するスペイン語基本の500単語』，徳永志織，愛場百合子，語研，2024年1月
- 『フランス語 スペイン語 イタリア語 3言語が同時に身につく本』，藤田健，かんき 出版，2024年1月
- 『アメリコ・カストロ：スペイン史学のドン・キホーテ』，本田誠二，水声社，2024年1月
- 『驚か太陽か？』，オクタビオ・パス，野谷文昭（訳），岩波書店（岩波文庫），2024年1月
- 『テラ・アルタの憎悪』，ハビエル・セルカス，白川貴子（訳），早川書房，2024年1月
- 『マルガリータ王女の肖像：宮廷画家ベラスケスの栄光とスペイン・ハプスブルク家の落日』，柳澤一博，文芸社，2024年1月
- 『果樹とはぐくむモラル：ブラジル日系果樹園からの農の人類学』，吉村竜，春風社，2024年1月

- 『比島民譚集：フィリピンの島々に伝わる話』，火野葦平ほか，国書刊行会，2024年1月
- 『中国を目指すザビエル：川上島での活動と崇敬の端緒』，岸野久，吉川弘文館，2024年1月
- 『ことりっぷ会話帖 スペイン語』，昭文社，2024年2月
- 『世界を救うための教訓』，ロサ・モンテロー，阿部孝次（訳），彩流社，2024年2月
- 『アルハンブラ宮殿物語：グラナダの奇跡と王たち』，西川和子，彩流社，2024年2月
- 『世界の建築・街並みガイド：フランス・スペイン・ポルトガル 最新版』，入江雅之ほか，エクスナレッジ，2024年2月
- 『美食の街を訪ねて スペイン&フランス バスク旅へ 最新版』，金栗里香，イカロス出版，2024年2月
- 『継承ポルトガル語の世界：地域とつながり異文化間を生きる力を育む』，拝野寿美子，ナカニシヤ出版，2024年2月
- 『死んでから俺にはいろんなことがあった』，リカルド・アドルフォ，木下真穂（訳），書肆侃侃房，2024年2月
- 『恐るべき緑』，ベンハミン・ラバトゥッツ，松本健二（訳），白水社，2024年2月
- 『地図で見るラテンアメリカハンドブック 新版』，オリヴィエ・ダベース，フレデリック・ルオー，太田佐絵子（訳），原書房，2024年2月
- 『近世陶磁器貿易史：太平洋・インド洋への「陶磁の道」』，野上建紀，勁草書房，2024年2月
- 『ラテンアメリカと国際人権レジーム：先住民・移民・女性・高齢者の人権はいかに守られるのか？』，宇佐見耕一（編），晃洋書房（同志社大学人文科学研究所研究叢書），2024年2月
- 『ペルーから日本へのデカセギ 30年史』，ハイメ・タカシ・タカハシ，エドゥアルド・アサト，樋口直人，小波津ホセ，オチャンテ・村井・ロサ・メルセデス，稲葉奈々子，オチャンテ・カルロス，インパクト出版会，2024年2月
- 『現代ペルーの政治危機：揺れる民主主義と構造問題』，村上勇介（編），国際書院，2024年2月
- 『言語教育のマルチダイナミクス：多様な学びの方向性』，杉野俊子（監修）明石書店，2024年3月
- 『キクタン ブラジル・ポルトガル語 入門編 改訂版』，福森雅史，アルク，2024年3月
- 『スペイン学』，第26号，京都セルバンテス懇話会（編），論創社，2024年3月
- 『マリーナ：バルセロナの亡霊たち』，カルロス・ルイス・サフォン，木村裕美（訳），集英社，2024年3月
- 『アチケと天のじゃがいも畑：ペルーのむかしばなし』，宇野和美，BL出版，2024年3月
- 『言語、文化の狭間で：歴史における翻訳』，平田雅博（編），原聖（編），割田聖史（編），三元社，2024年3月

- 『キリストにおける新たなまなざし』，川中仁（編），上智大学出版，2024年3月
- 『アメリカ外交の歴史的文脈』，西崎文子，岩波書店，2024年3月
- 『インディアスの破壊をめぐる賠償義務論：十二の疑問に答える』，ラス・カサス，染田秀藤（訳），岩波書店（岩波文庫），2024年3月
- 『「多文化共生」言説を問い直す：日系ブラジル人第二世代・支援の功罪・主体的な社会編入』，山崎直子，明石書店，2024年3月
- 『キクタン スペイン語 入門編 基本500語レベル 改訂版』，吉田理加，アルク，2024年4月
- 『キクタン スペイン語 初級編 基本1000語レベル 改訂版』，吉田理加，アルク，2024年4月
- 『キクタン スペイン語 初中級編 基本2000語レベル 改訂版』，吉田理加，アルク，2024年4月
- 『厳選スペイン語日常単語』，語研編集部，語研，2024年4月
- 『基礎からレッスン はじめてのスペイン語』，本橋祈，ナツメ社，2024年4月
- 『エル・スール 新装版』，アデライダ・ガルシア＝モラレス，野谷文昭（訳），熊倉靖子（訳），インスクリプト，2024年4月
- 『僕の中で君自身を見ることができたなら』，カルロス・フランス，富田広樹（訳），水声社（フィクションのエル・ドラード），2024年4月
- 『クララ：カタツムリはカタツムリである』，ヌリア・ロカ・グラネル，喜多延鷹（訳），彩流社，2024年4月
- 『戦争は、』，ジョゼ・ジョルジェ・レトリア，木下真穂（訳），岩波書店，2024年4月
- 『ハプスブルク家の歴史を知るための60章』，川成洋（編著），明石書店（エリア・スタディーズ），2024年4月
- 『運び屋として生きる：モロッコ・スペイン領セウタの国家管理下の「密輸」』，石灘早紀，白水社，2024年4月
- 『収奪された大地：ラテンアメリカ五百年 新装新版』，エドゥアルド・ガレアーノ，大久保光夫（訳），藤原書店，2024年4月
- 『多言語的なアメリカ』，西成彦，作品社，2024年4月
- 『ブラジルの人と社会 改訂版』，田村梨花ほか（共編），上智大学出版，2024年4月
- 『超入門！書いて覚えるスペイン語ドリル 音声DL版』，徳永志織，ナツメ社，2024年5月
- 『ラテンアメリカ文学を旅する58章』，久野量一（編著），松本健二（編著），明石書店（エリア・スタディーズ），2024年5月
- 『ラテンアメリカ文学の出版文化史：作家・出版社・文芸雑誌と国際的文学ネットワークの形成』，寺尾隆吉（編著），勉誠社，2024年5月
- 『エルサルバドルを知るための66章 第2版』，細野昭雄（編著），田中高（編著），明石書店（エリア・スタディーズ），2024年5月
- 『インカ帝国 歴史と構造』，渡部森哉，中央公論新社（中公選書），2024年5月
- 『夜明けをまつどうぶつたち』，ファビオラ・アンチョレナ，あみのまきこ（訳），NHK出版，2024年5月

### 【HISPÁNICA 編集委員会より】

HISPÁNICA 第 69 号の原稿を募集しています。下記の投稿サイトからご投稿ください。詳細については、学会ホームページの機関誌投稿規程をご参照ください。

<http://www.gakkai.ne.jp/ajh/revista/normas.html>

### 【編集後記】

会報 31 号をお届けします。巻頭言をお寄せいただいた川上先生はじめ、ご寄稿いただいた方々には心よりお礼申し上げます。

編集にあたっては、前号に引き続き、スペイン語圏の多様性を念頭にいくつかテーマを設定し、日本語の原稿ばかりにならないよう配慮しながら、会員間の情報共有の場や意見交換の契機となるよう努めました。新刊案内にはポルトガル語圏やフィリピン等に関する書籍も含めましたが、写真集や画集、料理書等は（個人的には取り上げたいと思いつつ）今回も見送りました。何をどこまで掲載すべきか、いまだに悩ましいです。

新たな試みとして、学会員の研究活動を一望に収めるとともに学术交流の機会とすべく、各地で行われている研究会の年次報告の連載を始めました。初回ということもあり、まったく網羅できておりませんので、会員の皆さまには、趣旨をご理解いただき、ご協力くださいますようお願いいたします。

また、学会ウェブサイトの「会報アーカイブ」に 20 号以前のバックナンバーをアップロードいたしました。作業にあたり、名誉会員の福島教隆先生には多大なるご協力を賜りました。心よりお礼申し上げます。

最後に、この場をお借りして、公私にわたりお世話になった学兄の遺徳を偲び、ご冥福をお祈りいたします。

(広報委員長 中井博康)